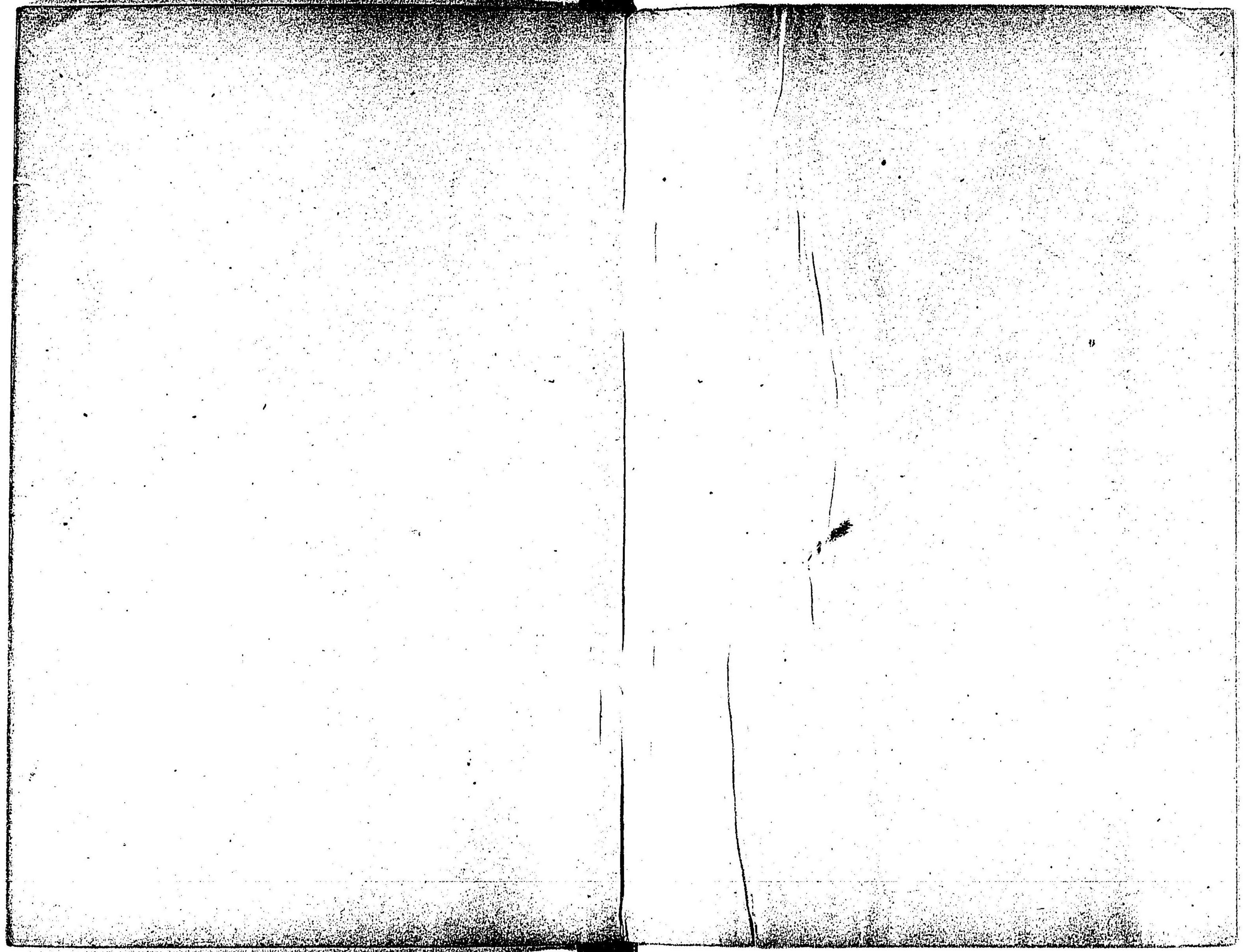


幸田露伴補
故村田琴伴著
琴乃音

258
96

行鼓堂陽譽



特 11
378

序
琴伴女史

生薄幸幼

にして而して譜はず、敷く薄氷の危懼を履めり、人根に境逆なるの
 に立つて關心獨苦みて、柔徳を全くせんことを思ひ、義絶え恩廢る
 の時に至つて、玉情猶温にして、宿業に徇ふことを甘なふ、荆棘膚に
 通る實は眞を酸くするに堪へたり、微纏胎に係る、昂ぞ能く身を脱
 せん、蓋し人生の磨礫を受くる、至れり矣、盡せり矣、其の天命の荼毒
 を被る、苛なる哉、惨なる哉、然り而うして、氣質の淡雅なる、暢神滌慮
 酒茶を須ひず、風懷の瀟洒たる、遺愁忘憂、惟詩文に頼る、是を以て霜
 夜雪曉、或は暗涙を凄冷の室に呑むも、小研纖筆、頗る幽悲を推敲の
 樂に緩ふ、但憾むらくは、磋琢猶粗にして、藻綺未だ足らず、玉の如く

序

40 7 30
空

錦の如きの美觀無きも、既に見はせり素質陋ならず、精采愛す可くして、趣を俱なひ巧を俱なふの佳致ありしを、苟くも吟哦の年を積まば、必らず辭章の道成りしならん、然るに碧翁情無くして、蒼天祐けず、哀しむ可し、燈華宵に墜ちて、寒風水の如く、鵬鳥晨に啼きて、凍雲閨を侵し、儵然として、蕙摧け芝折れ、忽焉として身死し、魂逝けり、嗚呼存生の言ふ可からざる、久視よ夫れ誰か能くせん、但壽短くして福饒からば、則ち死も甘んず可し、身亡び望敗れぬる、其の悲何ぞ堪へん、乃ち吐瀾を芸編に存して、芸編聊か志を傳ふ、茲に風丰を芳詞に懷ふに、芳詞皆涙有り、予是に於て天の人を待つ所以を思ひて、悵然之を久しうす。

明治丁未夏日

露伴識

琴伴女史幼而敏慧、稍長好弄文字、入露伴先生門而學賦新詩、草雜稗、屹々不倦、形管之煒蓋有期于他日、不幸伉儷不諧、齋志蚤世悲矣、女史於予有葭莩之親、屢來予門、出其所稿、乞正予、每以病懶不能謝之、而不料其忽焉獲疾、竟成永訣也、今對遺編悵然者久之。

明治四十年七月

珂南小史

序



村園琴伴女史肖像

九泉歛作不歸人
遺卷累篇空泣親
一語丁寧呼寂々
音容勞髣幻中真

哭琴伴女史
珂南小史
未定稿



故村田琴伴女史肖像

九泉歎作不歸人
遺卷累篇空沈親
一語丁寧呼寂々
昔容勞號幻中眞
哭琴伴女史

珂南小史
未定稿

村田琴伴女史一月十七日病みて遽かに逝きぬ、齡二十二、越えて二十日茶毘に附す、柩を町屋の火葬場に送るもの、其の母、其の弟、其の友、其の隣人等。

谷中の初音町庭には、鶯來啼く梅ありて、此年若き女詩人の琴を卸し、又た硯を置くにふさはしく思はるゝ町の名なり。天王寺の茂林の中に聳えたる五重塔を右に見て、低き屋並の寂しき小路に入れば、喪ある家を問訊するまでもなし、豆腐屋と青物店との間なる窄き露地に扉もなく、て歌灰したる木戸の柱に村田と記せし一小紙片の貼られたるは正しく今は亡き人の筆の蹟なり。雪もよひの空は灰の色に陰りて折から大寒に入れる日の風寒く、膚に泌む、木戸の前に青簾深くたれたる長柄の柩を昇ぎ据ゑて、或は踞し、或は行める、白丁の男五六人、衣の袂懐背

に一斗の風を含ませ鼻の頭は紅くして時の到るを待ち居たり。
窄き露地を入れれば霜柱深く、履齒の痕、靴の痕、草鞋の痕ありて狼藉たり。
十數歩にして井戸あり、井の邊り薄氷したる行潦の玻璃のごとく踏み
砕かれ常に日に背きければにや、土も爛れて紫に、井の水流す小溝は鐵
漿を覆へせしにも似て、蟹の眼と簇り浮ぶ小さな泡沫の靜に漂ひつゝ、
消え行くなり、井戸を前にしたる格子戸作りの低き家こそ、年若き薄倅
の小園秀小説家の住しとごるなれ、低き簷端に立て掛けて紅き白き數
旒の旗あり、籬に傍ふて枝に毘々たる剪紙片を懸けたる眞榊あり、寒瀾
屋を掠めて吹き下し、飄搖の旗竿を抱いて樂る家は人なきが如く靜か
なり、微かに啼嘘の聲を聞く、忽ち寂莫を破る拍手の聲起る、神官今は棺
前の祭文を讀むなるべし、人を避けて息らく風裡に起ち、靜かに此の年

若き女詩人の短かき生涯を憶ふ。

琴伴女史名は光子、水戸の人なり、父は熙母は金彌、祖父は實に水府弘道
館の教官、寺門眞卿先生なり。女史東京に生る、小學を卒へて府立第一
高等女學校に入る、年十八にして幸田露伴氏の門に入る、靄護精舎の詩
筵、余は時に女史と相ひ見たり。風丰瀟洒顔の白きこと蠟のごとく、雙
頬濼く紅を暈す、明眸にして皓齒、善く笑み又た善く語る、而も余女史と
相語るの時なかりき、一昨年の初冬、吾が古道照顔廬を訪過し、南暄の窓
下に文を話すること半日、余此日を以て始めて女史と語り、且始めて女
史の爲人を察ることを得たり。女史語りて曰ふ、今人の文にては獨歩
鏡花の作を好み、詩と歌とは泣菫品子のを好むと、而して露伴氏の作る
ところの二日物語を稱して明治に於る美文典型なりと語り、更に花鳥

風月の歌に入りて、花に在りては睡蓮と木蓮と蘭科のものを愛し、禽に在りては鸚鵡と鷺とを愛し、雨は秋雨よりも春雨を愛し、月は望の圓かならんよりは新月に趣きありなど語る。其の世の女流に見るところの媚態なく、街衿の容なく、恬愴にして洒脱、而も清淑の氣品あり、余をして竊かに今の所謂海老茶式部の中に斯のごとき憎氣なき婦人あるかを思はしめたり。誠に一點厭悪すべきところなき女史のごときは當代の女流に稀に見るところなりき。爾後余は劇務に在りて久しく霞護精舎の詩筵に遠ざかり、偶々筵に上ることあるも終に復た女史と相見るとの時なかりき。其後余は「文藝」の女史の處女作なる「花一時」の小説を読みたり、貞淑にして而も薄倖なる婦人の破鏡嘆を描きしもの着想も凡ならず、采藻も亦た富贍なり、余之

れを読みて女史の前途に幸運あれと祝福したり。昨歳の春三月女史書を余に寄せ来る、曰ふ郷里水戸に還り文學士某氏の家に歸ぐと、余は竊かに女史の爲めに佳婿を得たるを喜び、其の爲人の恬愴にして愛すべき女史なれば、伉儷定めて蜜に似て家庭は應に長しへに春あるべしと想ひたり。

十八日の夜、女史の弟、靜一の名をもつて訃報来る、曰ふ光子暴かに病み、眞泉病院に入りしが十七日の朝七時終に起たずと、余この報を得て茫然として自失したり、女史眞に死せるか何ぞ世を捐るの速かなる、既にして覺りて以爲らく、眞泉病院は婦人科産科の専門醫寮なり、女史は早くも母となりて終に其産蔭に逝きしに、あらずやと、悽心轉た切に、直に簡を飛ばして友に問ふ、返書来る、曰ふ女史の短生涯は誠に悲惨を極め

たり初め某同郷の故わりて、女史と交はりて其の才色を喜び強て女史を迎へて婦となす、圖らざりき舅姑頑犢某も亦た放縱にして家産を理めず、酷薄にして女史を苦しめ虐待到らざるところなし、婚後數月の後水翁自ら其の鑑識の誤れるを悔い、女史を將て京に還り、今や離婚の訴訟中なるも去る時女史既に孕めるあり、沈憂して家に在り、悶を排する唯だ文墨あり自ら曰ふ、胎中の一塊肉は無情の人の子なれども、我を母として吾が懐に宿りぬ、宿縁甚だ深し、われ復た二夫に見えず、寡居して此子を人となさんと、潤筆の錢を得るあらば乃ち布帛を購ふて手づから胎児のために其衣を裁縫す、幾襲の鮮衣は匣に充てり、本月は臨月十六日夜猝かに病を獲擔架に載せられて病院に入る、翌朝六時産氣あり、産に臨んで瘞瘡を發し終に胎兒と共に逝く、悲酸悽慘多く語るべから

ず、計に接して余は唯だ南無阿彌陀佛を唱ふのみと。
女史が慘ましき短生涯を憶ふてある時、神官既に祭文を讀み終りて棺は柩輿の中に移されたり、寂しけれど威儀ある行列の先頭に翻がへる銘旗と柩前に白丁の擔ひ行く墓標の文字は朝比奈知泉氏の書するところ、柩後に女史の母其二弟威容甚だ瘦せて藥草履の音もなく之に従ふ、友隣人黙して語らず、悄々たりやがて三河島の村に入り小川に傍へる路を行く、水幽咽して人と相隨ふ路は更に田壠の間に入る、黃泥飴の如し、輿丁の行くこと疾さが爲めに柩に従ふの人は多く後れたり、朔風臘々として面を吹く、寒きこと甚し、風烟莽々鎖して霧となる、旃影人影依稀たり、彷彿たり。
既に町屋の火葬場に入り棺を柩車の上に置く、念佛聲中此の年若き女

詩人の骸は茶毘一片の烟となる。此事終に記するに忍びず。嗚呼平
安和樂の生涯を送るべしと吾人ともに想ひたりし此の愛すべき女詩
人は最も殘虐なる運命と戦ひて花のごとく散り去りたり。實に女史
の處女作なる「花一時」は憶へば其の生涯の識語なりき。花や酥雨之れ
を培ひ、惠風之れを養ひ、天の春の爲めに工みする其費まことに費られ
ず、一朝して無頼の風伯雨師を驅役して摧殘すところなからしむ、造
物畢竟何の意ぞや、余は此の薄倖なる女史の運命に疑なき能はず。
琴伴遺稿琴の音成る、乃ち此薄倖なる若き女詩人の柩を送るの
記を録し、以て序に代ふ。

丁未初夏

麗水生 遲塚金太郎識

琴伴女史の遺稿に題す

妙齡の佳人あり一夜來つて當代の文を談ず、危言麗句口
を衝いて出づ、予密かに歎じて以て稀代の才媛となす、去
るに臨んで戲に問て曰く卿が理想の男子ありや、若しあ
らば果して何人、彼女嫣然一笑して曰ふ、雨宮敬次郎なら
ずんばそれ渡邊國武ならんかと、予異んで問ふそは卿が
崇拜的人物ならん、曰く否、史記列傳中に於ては妾が理想
の良人雲の如く存在するを知らんも、今日にありては右
兩名の内に過ぎずと、宛轉玉の如き少女の紅唇よりこの

序

横溢せる言辭の發せんとは余は殆んど荒肝を挫かれ
る心地しぬ、超えて三年彼女の計を報じ來るものあり、予
未だ信ぜず、再三檢じて始めて其信なるを知るに至つて
嗒然たること少時、嗚呼彼女は玉碎したるなり、而してこ
の如き才媛これ蝸牛門の一時の花なりき。

岫 雲

琴の音

目次

若き士官	一
母の思	四〇
戰爭怨	四六
若き妻	五一
士官の妻	六〇
袖しぐれ	七三

戀？愛？……………八三

海老茶氣質……………一〇〇

義姉妹……………一〇〇

軋轢……………一二九

花ひととき……………一三九

かへりざき……………一七三

短詩……………一九四

琴の音

幸田露伴補
琴伴女史著



水戸上市の共同墓地を二十三四の勇し氣な小氣味の良い海軍士官が、
 櫛と線香とを左に持ち、右に箒と水桶とを提げた墓所守を先に立て、
 悠悠と足を移した。
 菩提を弔ふ人も無いと見えて、卵塔が斜に倒れた上を、青苔が一面に蔽
 つて、亡者はさぞ迷つて居る事であらうと思はれる所を過ぎて、其處か

若き士官

ら右に折れて墓地の中央に、大きな椎が二本両方から重なり合つて居る、一劃の墓域の前で立ち止つた。小門の門を緩く揺せば手に従つて門は開き、枯れた椎の葉がひらくと舞ひ散つた。墓所守は梅松を交へ植ゑた周囲の邊から、一帯に掃き清めて、黙禮して立去つた。

暫て件の海軍士官は正面に形も大きさも同じく一對並んで居る右手の石碑の前に跪いて、

「お、父上……お久しう御座います。」
とでも云ひさうな様子で懐し氣に石碑の頭から臺の處まで見下した。
「父上……僕は去年の十二月首尾よく兵學校を卒業致しましたが、喜んで下さる人は伯父伯母斗りです。……僕が七歳の時に母上

が御失りなすつて後は父上のお手一ツで實に……實に……冥加に餘る御養育の御恩もお返し申さぬ先に、父上は……あ、折角卒業して此からと思へば御亡くなりなすつて……。」
と心中に感慨した餘りにはらくと落涙したが、又

「然し……僕……。」
と壯心凜々たる様で、

「此度は名譽です。實に愉快です。……日本で一二の戦艦なる敷島に乗り組んで樺太以來怨み重なる露西亞を討に行くのです。

……。」
感極まつたか固く拳を握つて、

「壯快此上も有りません、父上が被居つたならば何んなにかお喜びな

さるでせうと思ひます。實に四千餘萬の同胞は奮躍して立ち上る時ですもの。」

眼は自らに釣り上つて、虹氣萬丈といふ様である。

「唯……残り惜しいのは父上の墓前に……最う是れ限りかと……」

流石の勇士も潸然として俯向いた。

暫く經つて、心を決したやうに面を上げて、

「然し……僕にやあ……父母もないし妻も無いし……僕の様な者が花々しく戦死しなくつちやあ……誰が戦死させう！やをら立上つて、」

「父上さらば……」

云へど答は椎の木の梢を渡る風のみであつた。

(二)

「母上今も申上げた通り、軍人の譽れ、是れに上越す事も御座いませぬ。……僕は母上にお別れ申してから最う十六年……母上が御臨終の時、美代(乳母)と二人で御床の傍に坐つた時に、母上が「猛夫や一生懸命に勉強して必ず立派な軍人となつて御國の爲に盡し、假りにも卑怯な振舞をして母さんが無い子だからと笑はれるやうな事をしてお呉れでない……いゝかえ？」と細い透るやうな白い御手で頭を撫でて下さつた今でも忘れる事が出来ないで、同じ年配の夫人を見る度に悲しくなるので御座います。」

猛夫は無言。

何れをか流るゝ水の響がしやら〜として、丁度彼の世の聲を聞くやうだ。

「此れから一二ヶ月の後に僕の少尉候補生の服が紅の血潮に染められて此處に飾られる事がありませう……其時は猛夫が眞に母上の御言葉を實行した時です。さらば母上。」

父上の色白く絶えずにこゝ成された御顔、うる覚えながら瘡せた青白い母上の御容子を思ひ出して、猛夫は唯茫然たる斗りであつた。

兵學校入學の當時父上の亡くなられた時の淋しさ生れて此處に二十三年の記憶は變る變る腦裏に浮んで、轉た懷舊の情に堪へかねた。

「あゝ何うせ……死ねば皆な一所になるのだ。」
と吐いて奮然として突つ立つて今や暮れんとする西の空を睨んだ其

の狀態は丁度石像でいもあるやうだつた。

「父上母上さらば……。」
と敬々しく禮拜して未練なくつか〜と墓門を出たが、尙名殘惜し氣な風で振向いた。

誰が家の子の業であらう！遠く幽に聞ゆる笛の音は長く長く引いて別れを惜しむかの様であつた。

(三)

「猛さん——最う一ツお重ねなさいな。」
此頃新たに建増した八疊の座敷——床の一軸には文晁の筆の墨繪の龍が雲を巻いて雨を起して居る。薄端の大きな花瓶の中央に綠竹は節高く潔く立ち松は歲寒の姿豊かに、又清らかな白梅は星のやうに數

點美しく咲いて、餘芳室内に芬々して居る。

先づ水戸では一と云つて二と下らぬ家柄であらう！

猛夫は伯母の言葉を聞くともなく聞かぬともなく、深く物思ひに沈んで居るやうに後の柱にもたれて、身動きもせず斜に天井板を見詰めた。

『猛夫最う一ツ飲れ。』

頭の雪と成つた伯父は杯を差し付けたのであつた。

猛夫は『はッ』と斗り夢から覺めたやうに手を出して、機械的に杯を受け取つた。

此様子を始終目をも離さず見成つて居た伯母は愛想よく笑ひながら、

『今日は猛さん何うかして居るよ……強く鬱ぎ込んでさ。』

『おッは、>>>。』

と猛夫は無造作に事も無氣に見えた。

『左う云へばお藤さんが來なさりさうなものだねえ。去年の土用休

暇に、猛さんが我家に居た時は、毎日のやうに……全く鳥の泣かぬ

日は有つてもお藤さんが顔を見せない時はない位だつたもの……

：昨日猛さんがお暇乞に寄つた時に不在なら尙の事ねえ……。』

『なに遇ふにも及ばないですよ、然し此れが永の……別れ……に

成るかも……知れませんがね。あッはッ>>>。』

込み上げて來る胸の苦しさを悟られまいと苦笑しながら冷えた杯の

酒をぐつと一口に飲み干した。

『榎木や。』

と伯母は傍に行儀よくさちんと膝に手を置いて坐つて居る今年十四

になる自分の娘を呼んで、

「あのねえ、奥へ行つて最う一ッお銚子を持つてお出でとお云ひ。」

「はう。」

と軽く膝を立てたのを猛夫は制して、

「最う澤山ですよ。僕は此通りですもの。」

真赤に染まつた面を顔が熱つてと云ふやうに手巾で拭つた。

「まあいゝさ。戦地へ行くと暫く飲めまいから。」

情ある伯父は臆で榎木に命じた。

「さあ、猛さん、最う一ッ、何です、ねえ、男らしくもない。」

「はあ、僕は最う澤山——。」

(四)

伯母は沈んだ調子で、尚ほ言葉が続けた。

「お藤さんは彼の通りの別嬪さんだし、それに東京の女學校も一番で卒業なすつたさうだし、佛蘭西語は父様の御仕込で最う久しい事習つて居なすつたんだつてね。琴だの、お茶だの、お花だのは云はずともさ。皆んな奥許を取つて居なさるんだから、そりやあ妻ひたいと云ふ人は降るやうに有るんだよ。そら工科大學へ行つてる菊地の子息ね、それから文科の佐々木の秀雄さんね、彼の人達は、大變に娶しがつて大願をして居るのだよ。」

默然として眼を閉じて、猛夫は熱心に耳を澄ました。

伯母は華奢な銀烟管に一服付けてすばくと吸つて、吐月峰の蓋を取り、ぼんくと仔細らしく叩いて、

「中でも彼の吉住さんねえ。彼處ぢやあ宣さんが是非娶しいと云ふ
斗ぢやあなく、父様も母様も妹さんもお藤さんを知つて居るもんだ
から、再三再四呉れ呉つて云つて來るんだよ。……夫でお藤さん
の母さんは家の爲又文ちゃんの後々の助けにもなるから是非遣り
たいと云つて居なざるんだけれども、お藤さんが何うしたものか、
……死んでも嫌だと云ひなざるんだとさ。……猛さんは何う
お思ひだえ？宣さんの家は財産も可成有るし、父様も水戸の人では
まあ一二だあね、三重縣の知事をして居なざるんだもの。……宣
さんだつて今年論文とやらが巧く行けば法學博士だらうぢやあな
いか。……それで男振りなり、身體風なり、水戸なんぞにやあ二人
とは有りやあしないさ、丸で光氏さんのやうだもの。……何が不

足なんだか私には少しもお藤さんの氣が知れないのさ。」
冷えた茶を苦さうに飲み下して、

「其の話は去年の十一月始まつたのに、未だ纏らないのだよ。さうし
てお藤さんは暫く病氣だと云つて顔の色も青褪め、此頃は大變に瘠
せて凄いやうだよ。だがねお藤さんはあの通りだから私なんぞが
行くと眞から嬉しさうに款待して、夫りやあ涙が溢れるやうだよ。
……世間の人は嫉むのだねえ。お藤さんは餘り美しいから肺病
だなんて評判して居るのだよ。まさかさうでもあるまいねえ猛さ
ん。」

(五)

「屹度——お藤さんは外に思つて居る人が有るんだらうと私しやあ

考へるよ。猛さんは何うお思ひだえ？」

猛夫は無言の儘、想ひ有氣に腕を拱いた。

「ねえ猛さん、——彼の位な人に想はれた人は何と云ふ幸福者だらうねえ。」

猛夫の面は火のやうになつた。

而して満足な笑が知らず／＼引き締つた口の邊に漏れたのであつた。

「あら——文ちゃん被入しやい。」

柁木のいそ／＼と云ふのに續いて、

「猛夫さんは未だ被居しやるの？」

と息切れの止まぬやうな聲が玄關の方に當つて聞えたが、伯母と猛夫が云ひ合したやうに其方に視線を注いだ時は、最う藤子の妹の文子か

縁に向つた障子を開いて、懐し氣に猛夫の傍へ摺り寄つて、姉に似た活した眼で、猛夫の美しく紅葉した面を、じつと眺めて居つた。

「まわ——猛夫さん、色が黒く成つてねえ。」

「はッは、ハ、ハ、ハ。」

と幼子のやうに大口開いて笑つて、可愛くつて堪らないやうに文子の小さな肩を叩いて、

「文さんも大きくなつたね、今年は何年？十三七ツかえ。」

「あら。」

と邪氣ない口付して、さも可笑しさうに、

「い、わ……ねえ柁木さん、私十二だわねえ。」

文子は急に心付いたやうに長い袂から友禪の小さな布呂敷包みを出

して、

「猛夫さんは品を姉さんが」

と差出した。猛夫はどき付く胸を押し沈めて戀人が我に解けよと結んだ其の結目を疎略にせず鄭寧に解き離した。

伯母も柁木も瞬さへせぬ。

中から出たのは白い毛絲の腹巻と見るからに懐しい絹の手巾が二枚とであつた。

「お、藤さん忝なす。」

と云ふ言葉を噛み殺して凝然と見成つて居ると、

「姉さんが今日……此品を持って上らうと云つて居たんだけれど、病氣なのに夫れを編んだものだから肩が凝つて頭痛がして臥て居

るのよ。」

其程迄に自分を愛して呉れるかと込み上げて来る嬉しさを唾と一所に飲み込んで、

「あ、さう……。」

と猛夫は尙一品一品手に取り上げた。

腹巻の表は我名に縁む笹編み裏は己が名の藤を其儘編み出したのであつた。

裏と表の間には絹綿を薄く引いて、去年の春の堇の花が可憐に優しく、模様やうに幾つとはなく壓花に成つたのが這入つて居た。

其の面倒斗りでも大抵ではないのに尙ほ古武士が最後の出陣の際蘭麝の香を兜に焚き込めたのと同じ心なのでもあらうか、バイオレット

の匂馥郁として床しさは實に此上もない。

(六)

手巾の其の一には「大丈夫は名をし立つべし萬代も千代も傳へて語りつぐかな。」と云ふ古歌を水莖の跡見事に紫色の地に白で縫ひ出して端に少さく有るか無きかに藤子と印してある。

最う一枚綾の白い手巾には燃ゆる想を紅の繡絲に現はして、「紅の初花染の色深く思ひし心我れ忘れめや。」此れは無名である。誰が歌であらう！自分が昨日藤子の母に「とても世に永らふべくもあらぬ身の假の契を争で結ばん」と云つた正行的の方が軍人は良いと話の次に云つたのを聞いて斯う書いたのであらう。

「文ちやん有難う。姉さんに宜しく云つと呉れ。」

跡は沈黙。

やがて猛夫は愁然として、

「文ちやん僕は最う此れ限り……遇へないかも知れなうよ。」

文子も悲しく感じたらしくほろりとしたが少女ながら健氣で、

「猛夫さん……軍人が御國の爲に死ぬのは譽だわ。私も男に生れて軍人に成りたかつた。」

「豪い。文ちやん！流石は水戸の女だ。」

と賞められて嫣然しながら。

「一生懸命に働いて勳章取つて被入つしやい。ねえ猛夫さん。さうすりやあ我家の姉さんが何んなに喜ぶか知れないわ。」

猛夫は罪の無い文子の言葉に赤面はしたが耳にも入れない風をして、

「姉さんに宜しくだよ。」

姉さんの語は、如何に重く、如何に強く、どうして如何に誠心を込めて口を出たか！

「姉さんも私も、猛夫さんを我家の兄さんのやうに思つてるんだから、成丈け死なないで頂戴よ。」

猛夫も伯母も苦笑した。

(七)

常盤の松や梅が香に其名を知られた天下に三つの公園も、未だ鶯の初音聞かねば、歌人も杖を曳かず、陸月とは云ひましても今日のやうな寒い夕は、常盤神社の邊を散歩する人の影さへも見えぬ。社の後は老杉森々として、枝を交へ、何となく濕氣があるやうで、總べてのものを青め

て見せる程、緑色の光線に満ちて陰々として居る。

稷々と聳え立つた大樹の頭は、悪魔のやうにざわ／＼と私語を合つては、拜殿を一呑にしやうと、蔽ひ被さるかと思ふと、又風が左の方の小笹をがさ／＼と動して、今にも何か躍り出して來さうである。

前面の階を小刻みに登つた。さも疲れたやうな静かな優しい足音は、堂の前ではたと止つた。

太陽は疾く西の海に沈んで、世界は黒幕を張り渡したる如く、月も未だ上らねば、柏手の主は知りやうもないが、其の足音の様子では確かにうら若い婦人であらう！

禮拜する間は氣の張りで何者をも感ぜなかつたらしい婦人も、踵を返すと等しく恐氣立つたやうに、

「あゝ、黙つて来たから母様がさぞ御心配して被居つしやるだらう！」と獨言ちて身をふるくと振はした。

婦人の来る前から敷石の中程に佇んで祈念を凝すともなく又凝さぬともなく腮を懐に埋めて深く想ひに沈んで居た男があつたが、婦人は知らず暗い紛れに急ぎ足で其處迄来て、何やら前に蔽ひ塞つた者が有るのに驚いて面を上げると、丈の高い嚴めしさうな男がすつくと立つて居たのであつた。

普通の婦人ならば「キヤッ」位の叫びは發するであらうが、此の婦人は餘程賢い嗜みの良い質と見える沈重な態度で唯だちくと二三歩退いた斗りであつた。

月は漸く上つて、幽に二人の面を照したので、婦人は恐し氣に相手を透して見た。

「あら——猛夫さん。」

蘇生つたやうに突然男に取り纏つた。

「お、藤さん………遇ひたかつた。」

猛夫は右手に藤子を支へて左の手に總身の愛を込めて藤子の手を断切れよと斗りに握り締めた。

未だ宵ながら近所は寂寥。遠く何れかの寺で撞く鐘が袈に響いて凄然と聞えた。

(八)

「藤さん！折角遇つたのに泣いて斗り居ちやあ駄目だよ。ねえ、さお話しよ。」

と猛夫は藤子の雪のやうな頸をしつと見詰めた。

月はやゝ上つて澄み、猛夫の面を明晰と映した。色は海國男兒の日に晒けて淺黒いが、鼻高く眉秀でて何處となく才氣を現はして、燃ゆるやうな雙眼に、物に當つて後へは退かぬ氣が充ち満ちて居る實に凜々しい男らしい男だ。

「猛夫さん。」

と、藤子は張り裂けさうに云つて、

「私しやお最う貴郎に遇いたくつて遇ひたくつて……。」
と又泣くのであつた。

「そりやお僕だつて同じ事さ。……最う九月から五ヶ月も遇んのだもの。そんな事よりも早く云ふべき事をお云ひよ。遅くなるよ。」

母様が御心配なさるから。ね——藤さん。」

と容子には似ず飽く迄も優しく藤子の背を撫でた。

藤子は悲しさに堪へぬやうに、

「猛夫さん……私しやお此度他家へ嫁られるのよ……。」

と云ひ断つて、堪へ堪へた胸の堤が切れたやうに一時に「わつ」と正體もなく咽んだ。

「うむ、僕も伯母に聞いた。其の事で夕べから考へたよ。丸で一晩さんじりともせず。」

猛夫は尙ほ思案に心塞がる様子である。

「あら、どうしたらまあ——宜しいでせう！」

藤子は猛夫の腕に縋つた儘で懐し氣に其の横顔を見入つた。

其の氣高き美しさ。二三日前に束ねたらしい貴婦人巻は、少しの油氣もないが、丸で漆のやうで、鬢の遅れ毛は雪のやうな頸筋から、恰好の良いすらりとした肩の邊に翻れ掛つて居る。瑠璃の眼に、月の眉鼻筋の通つた口元の愛らしい何共云へぬ奇麗な人である。

「僕は良く良く考へたがね、藤さん怒つちやあ不可ないよ。いゝかえ。」と云ひ溢つて、

「あのね、藤さんは宣さんの處へ嫁つた方がよいよ。」

「えゝつた——猛夫さん！そりやあ……あ——餘りぢやありませんか。」

涙は滴々として羽二重のやうな藤子の頬から、猛夫の遅しい手へと落ちた。

藤子は嚙り上ながら、

「私しやあ其事斗りでもないけれども、此間から不眠症に係つて居るのよ。昨日貴郎が来て下さつても、丁度病院へ行つた留守で御目には係れず、病氣で休んで居るのに伯父さんの所へ上るのも變だと思つて、……種々……そりやあ工夫したのよ。到底……お目には係れない物と諦めて……せめては何なりとも贈て上たいとは思つても、夜なんぞ長く起きて居ては、母様が御心配なさるから、宵は皆なと一所に臥て……さうして夜中に密と起きて彼の腹巻と手巾とを製造たんですわ。私しやあ兎ても貴郎の……お側に着いて居てお世話を爲る事は出来なから、其代りに……そら、私の小形な寫眞が有つたでせう！彼れを腹巻の中へ入れて貴郎と生死を

共に爲るやうに仕たのですわ。私はこ——此んなに貴郎を思つて居るのに、猛夫さんは私にそんな事を……え——猛夫さ——ん。」

猛夫の身體を思ひ込んだ風情で搖るやうにした。

猛夫も流石に此の花の様な少女、而も自分の戀人が自分の爲めに斯くも心を勞して居るかと思ふと、一旦決した心も弱り、無理に我を立て、他を強る事も出来なくなつて自分の罪が如何に恐しく藤子の運命を傾ひかせたかと感じた。

(九)

「だから御志は彼の編物で澤山だと云ふんだよ。ねえ藤さん解つたらう。そんなに肩が凝るの？……え。」

猛夫の眼には怪しくも月に映じて眞珠のやうなものが輝やいた。

藤子は何時もながら猛夫が自分を愛憐つて呉れる言葉の優しさに「わつ」と泣き伏した。

「藤さん、そんなに泣かなくつても良いよ。僕は言ふまいと思つたが、最う云ふ！藤さん、僕わ——藤さんが……可愛くつて……可愛くつて眞に命も欲らない位に思つて居る。で藤さんが教へて呉れないだつて軍に行く前に申込をする位の事は知つてる。……が、其處だよ、藤さん。」

と力を入れて、

「僕わ——軍人だよ。いゝかえ、日本國の軍人だよ。さあね、事有る時には命を捨てるのが僕の役だ。殊に藤さんも知つてる通り此度の戦は我が邦の運命の分目だと云つてる位だらう。ねえ、だから愈々

となりやあ、僕の乗つてる敷島なんざあ——第一に目指されるのさ。
僕なんざあ甲板の近くには居るし、到底生きては歸れない、又
無論生還は期せん覺悟だ。……藤さん、僕の面を良く覺えて居て……

……お呉れ。ね。藤さん。」

と猛夫は藤子の方に男々しい面を向けた。藤子は漏れやうとする泣
聲を眞珠のやうな齒で噛み締めて、徐に猛夫の氣色を伺つたが、我れ知
らず「よ」と困しい聲を出して猛夫の胸の邊に頭を押し付けた。

「藤さん、何故泣くの。え……泣かないで良く僕の顔を見覺えて居
て……愈々戦死して仕舞つたら……せめては華でも……」
と猛夫も鼻を咽つた。

藤子は心中深く決したやうに、

「それぢやあ、猛夫さん、昨日母様に被仰つた事は本當なのね。正行的
だなんて、私しやあ、戲言だと思つて居たけれども、餘り氣に懸つて仕
様がないから、手巾に書いて上げたんだけれど……猛夫さん、貴郎
……戦死するから構はないと被仰るの？え、猛夫さん！もしそ
うなら私の心を知らないと云ふものよ。私しやあ……貴郎が何
うお成んなすつたつて……一日でも貴郎の妻と云はれりやあ……
ほ、本望ですわ。」

辛うじて言ひ放ち、泣聲を漏さじと手巾で口を押へた。
「それ程迄に……實に忝ない。」
と失神したやうに口走つて、右手に絶つて居た藤子の玉のやうな手に
接吻を施さうとしたが、忽ち電光石火のそれよりも早く猛夫の腦裏に

は、或物が晃めいた。

猛夫は元の猛夫に返つて、特地と儼然として、

「藤さんはそれだから不可ない。……藤さんは本望でも御母様は本望かい？え、藤さん、文ちゃんもそれが本望かい？え、藤さん。」

「本望ぢやあ有るまい。無論本望ぢやあ無いさ。平生は伶俐のやうでも未だ不可ん年が若い。……藤さん、たつた一人のお母様の事を考へたら、そ——そんな事は云はれない譯だよ。ねえ、藤さん。」

(十)

「常盤神社の前で誓ひを立てるのだから間違はないよ。断然——藤さんと僕との間の美しい清い愛は、是で、終りを……告げる事とし

やう。……僕は今此處で満足して……樂しかつた夢の中から覺めて仕舞ふ！果敢ないやうだがア、是非もない。」
猛夫は帛を裂くやうな調子で云ひ放つた。

「い——厭やです！」

藤子は嗚咽上げながら、幼児のやうに頭を振つた。

男は少し憤然として、

「藤さん。藤さんは水戸の人間の癖に、他の婦女子に對しても恥かし。未練な料簡を持つとるね。……今迄僕あ、それ程愚癡な人間だとは思はなかつたよ。……み——見誤つた。」
弱る心を強て荒らげて、此處をと斗り、藤子の急所を刺して、そしてこれを激さして思を翻させやうとした。

案の如く相手は水戸の士の氣象を受け續いで居る他人にすら後指を指れるを恥ぢて居る藤子は飽く迄も戀人に辱しめられて口惜しさ悲しさに堪へかねたのである。然し其の激した結果は猛夫の豫想には全く反した。

「猛夫さん！私しやあ水戸の女だから、厭です！男が日本魂を振り起して御國の爲めに命を捨てるのも女が心を守つて誠を徹すのも同なじ事ぢやありませんか。……わ——私は何と被仰つてもい——厭やです、他家へ行くのは。」

きつぱりと云ひ切つたが時ならぬ雨は長い袂をば絞る様に降注いたのであつた。我が爲に斯くも思ひ込んだ佳人を心とは反對の事を云つて、想ひを翻

へさするはつらき上にも困しと、猛夫は腸もずた／＼に斷り裂かれる思ひではあるが、今此處で氣を挫いてはと、

「それぢやあ藤さん、何うしても厭やだと云ふんだね。」

「良——ッ。」

決然として、

「僕も構はない！……此處に祭つてある義烈兩公に對しても濟まない申譯がない。……苟しくも男が考へを練つて云ひ出した事を自ら撤回しやう所以は無い。……藤さん最う絶交だ。……」

死——死んでも香華は……供へて貰ふまい！
忽然藤子を振り離して足音暴く立ち去らうとした。

藤子は固く猛夫の腕を捕へて何處迄もと追ひ絶つた。

「猛夫さん……勘忍して。お——お言葉に随ひます。」

「た——猛夫さん。」

(十一)

「それぢやあ藤さん、能く分つたな。僕は心残り無く出征する。彼の腹巻を……ふ、藤さんと思つて。」

「必ずお母様を大切に、文ちゃんを可愛がつてさうして……吉住さんに良くお——お事へよ。ねえ藤さん。」

「は——は、S。」

二人の涙は滾々として盡くる時が無い。

「僕あ、死——死んだら草葉の蔭でそればかりを喜んで居るよ。ねえ藤さん。」

「僕は最う亡い者と諦めて、ね、い、かえ藤さん……分つたかえ。」

「ア、藤さんと僕との間を破つたのも露西亞だ。……國の爲にも僕の爲にも、憎いのは無道を押し通さうとする彼の露西亞だ。胸の透く程働いて……心持好く死んで仕舞はなくつちやあ。」

言葉には湿りを帯びながら意氣昂然として腕を扼した。

「ですけれども何様か猛夫さん……何様かよくお身體を……おいとひなすつて……。」

藤子は猛夫の面をしつと見上げたが、其儘がつくりと首を垂れて涙に
聲は途絶えて終つた。

「さあ——藤さん。……遅くなるよ。母様が御心配なさるから……
送つて上げやう。……最う僕が……藤さんを見——るのも

見渡せば鏡の如き千波沼は凍つたやうに月下に廣がつて西に横たは
り偃せる櫻山東に茂れる吉田の森はぼんやりとして夢の中の景色の
やうに見えた。

* * * * *

猛夫は出立して仕舞つた。

其後春風は柔かに白梅紅梅の梢を渡り過ぎて、それから鶯の法法華經
の聲も次第に老いて、卵の花下し不如歸の雲井に鳴く頃とはなつたが、
なほ身にかゝるしぶきをも厭はず裾に薄寒い風も物ともせず如何な
る日にも必ず常盤神社へ歩を運んで居る憐れな一美人がある。あゝ
そも——其人は何を祈つて居るのであらう！

おぼろ夜

うたがひの雲 はれやらぬ
春のおぼろの 夕月夜、
おもひに瘦せて しよんぼりと
ひとり行く路 櫻 散る。

若き士官

母の思

皆様の厚い思召に對しまして、嬉し涙こそ湧き出ますが、何んで歎きな
ど致しませう。數ならぬ深を、司令官の命に代つた大忠義者よ、源平の
昔の戦に義經に代つた嗣信よ、との身に餘ましたる仰せ……思へば。
草葉の蔭の亡夫にも、鼻の高いわけで御座います。屹度墳墓の石は、嬉し
さに動搖いたで御座いませう。

私が嫁きましたのは今から二十年前、私が二十歳の時で御座いました
が、亡夫は海上の生活を致して居ますので、家に住まつて居ることは、一
年の内に數へる程なので御座います。

丁度嫁ぎました來年の春、亡夫の留守に只今の深を産んだので御座い

まして、六ヶ月振りで歸つて参りました亡夫の喜は、御話にも出來ない
位で御座いました。

不幸と申しますものは、致方のないもので、男の子が無事に誕生して、や
れ嬉しやと思ふ間もなく、平生は風邪一つ引きません亡夫が腎臓炎と
云ふ恐ろしい病に罹つたので御座います。

涙片手に、緑兒を抱へての心盡しも、恨しく效は御座いませんで、三年の
間を病の床に呻吟して、梅咲く頃は、櫻咲く頃はと、祈りました甲斐もな
く、とうとう、さうでなくづてさへ物悲しい秋の夕暮に、深を海國男兒に
して呉れとの言葉を、残しまして、桐の一片と共に散つて終つたので御
座います。すやくと、浮世を外にて、自然の懷に、嫣然と眠つて居りま
す三歳の深を、私は抱き締めたま、泣き崩折れて、兎角の考へも無かつ

たので御座います、一體海上の生活を致します人は、板一枚は地獄だ、な
どと申しまして、金使ひが大變に荒いので御座います、それに收入とても、
餘り多くはない私の家、加へては亡夫が、長の病氣に、醫者よ、薬よと、僅か
の積金も、皆な使ひ果しまして、致方なく、やう／＼其日を送つて居りま
したが、幸ひにも、亡夫の弟の深を引き取つて呉れましたので、私はしが
ない、暮に人仕事などを致しながら、其日を哀れに、春の花も、秋の月、一入
蟲の音などは、涙の種となりまして、不自由を致して居ります深に、少し
も多く小遣を遣りたいと、そればかりを樂しみに働いて居りました。
深も次第に、成長はなります、斯うして年月が経ちますれば、先づ不
足ながら、世に立つて參れますのに、運の悪いものは、致方のないもので、
折角深を引き取りまして、兎や角と、世話をして呉れました、亡夫の弟も、

假初の病から、突然彼の世の人となつて終つたので御座います。で、
深は、又々私の手元に歸つて參りましたが、六歳の子供、亡夫の遺言を履
みまして、どうかして學校へでも出して遣りたいと存じました、が女の
腕では、仲々出來ませぬので、泣くなく思ひ止つて居りますと、丁度今度
の戦争、種々と人様は、お願ひ申しまして、やう／＼給事に致しました、次
第、豪い者は、學ばずとも出世すると申す言葉を、力に、どうぞ亡夫の心を
全うして、軍人のお仲間入でも出來ますやうにと、明け暮れ、それこそ鳥
の鳴かぬ日は、御座いまして、祈らない時は、御座いませぬでした。
深が軍艦に乗り込みまして、から秋は紅葉と共に、褪せまして、冬は白雪
と、解け櫻となり、卯の花となりまして、幸ひに無事で御座いました。
丁度日本海に大海戦が御座いました、五月の二十七日、夜も次第に更け

て参りまして寂寥を破る號外の聲は、縫物に餘念のない私の胸に強く
淋しく響きまして遙に聞える犬の遠吠は、どんなに静かな夜を哀れに
致しましたたでせう！

此時私は變な心地になりまして夢のやうに立ち上りまして、亡夫の佛
壇の前にびたりと坐りましたので御座います。さうして、何とは知ら
ず無意識に祈念を凝しましたたが暫く致しますとはつと驚きまして、其
儘夢から覺めましたやうに涙が沸き出たので御座います。さめく
と歎く此時の容子を、人様が御覽になりましたならば、どんなに怪しい
と思召たで御座いませう！

あ、これが世に申す、血脈の知らせで御座いました。一日置きまして、
新紙に海戦中の美談と題しまして、あ、其彈着が若し今一二尺上方な

らば司令官も亦戦死する所だつたのにと、皆様の有難いお言葉取り分
け司令官様からは、我が身代りの青年永へに恩人として終生忘れない
との仰せ、身に餘りまして涙ばかりが溢れるので御座います。
あ、深の死は、日本國としては、此上もない大事な司令官のお命に變り
ました實に、實に、名譽な忠義な死で御座いました。

わかれ

凍らんとして 凍らずに

長き夜 咽ぶ 冬の川、

君に別る、この廣き野の

野中の流れ われと見よ、君。

母の思

戦争怨

他の方には斯様な事は申されませんが、貴女は振分髪からのお友達ではありますし、又御親切にも始中終私のことをやれ顔の色が勝れない様だとか、瘠せた様だなどと、種々御心配遊ばして、斯うやつて毎日のやうにお尋ね下さいますのに、私の胸を隠しましては、却つて隔てがましいとお怒りも御座いませうと存じまして、今日は思ひ切ってお話申しませう。成程宅で出征致したのは軍人として名譽此上も御座いませんし、又自分も嘸かし本望だらうと存じますが、……私も夫に連れ添ふ妻……喜んで送りは致しましたものゝ、出征致しました留守はなか……私の様な思ひを爲て居る方も世間には随分お有

んなさる事だらうと存じます、それを思ふと、私非常に悲しく痛はしくなりまして、思はず知らず涙がほろ／＼零れるので御座います。そして殊に私は、御存じの通り身分の低い……昔は兎もあれ、今では父も零落まして、華族の別荘守などを致して居るので御座いますから、他人様の前へ出まして、御交際などは出来ないの御座います。……此様な私の様な者でも、宅の好みでお姑様や親戚の御不賛成をも關はずに娶れてくれましたので、……どうも、其所の折合が悪く、私も始終其事計りを案じて居るのでございます。でも、宅が居ります時には、まさかには種々な事も仰られませんでした。が、此頃では貴女等がお歸り遊ばすと、後で屹度、流石身分は争はれないもの、などとお姑様の述懐を聞きまするが、其時の私の胸の苦しみは、まるで張り裂ける様です、……貴

女様などは其様なお覺えも御座いますまいが、そりや其苛い事と云つては實に例へ様がございませぬ。……此間もなんです、戦地へ送る品物について、いろ／＼の騒動があつたのでございます。早朝のことでした。お姑様がいつになく、戦地へ送るに何か良い物を見立て、買つて來いと被仰いましたから、私大變に嬉しくつて、嬉しくつて、朝の御飯も碌に頂きませんで、直ぐに買物に出掛け、本郷から神田、神田から京橋の方までも行き、銀座の龜屋で、良人の大好物の臘腸、鹽、鱈、乾牛肉や、なんかといふいろ／＼の罐詰物に、葉巻などを取り交せて買つて來まして、嘸、まあ、此物が届いたら、どんなにお喜びなさるだらうと、良人の平常喜びまする顔などを想像して歸つて來ますると、どうです、私の買つて來たものが、一から十まで、悉皆お姑様のお氣に入らず、まあ、お前

も氣が利かないね、戦地へは罐詰物なんかは、恤兵部の方から澤山行つてるから、そんなものを送つたつて何が珍らしい？お前も馬鹿に氣が利かない、智慧がないね、智慧なんか、出し惜みせんでも宜いよ、出し惜みするとお前の買つて來た罐詰とは違つて、ぢきに腐るよ、なんて被仰いますの、そして、早速御自分でお出掛けなすつて、いろ／＼の西洋菓子や、砂糖漬なんかを買つて來られ、今度は、また私に其品を小包のやうにして、封をしると云はれましたの。で、私は油紙ですつかり包みまして、濡れないやうにし、繩を縦横に掛けまして、しかつりと拵へまして、お目に懸けますると、今度は、また、どうしたものでせう、こんな認めやうで、戦地へやれるものか、と頭がわれるやうな大きなお聲で、いきなり、叱り付けて、びり／＼びり／＼と、油紙を破つて、又、別に、御自分でお包みなさいま

したのです。それも私が足りない故と存じまして其次には始めつから御相談申しますれば、そんな事も出来ないとは嫁の資格が無い矢張り人は氏より育ちだなどと仰られる切なさ、蔭で泣いて戦争が終局になるまでには、どうぞお姑様のお氣に入りまして、無事に歸つて来る宅を安心させたいと存じまして、及ぶだけ盡しましたも、終には私の事を戦地へ申し遣はされたと見えて、戦地から私へ長々との説諭の手紙が参つたので御座いますの、内願の愛なく御國の爲に奮闘させたいと存じまして、私の愚かさ一つで、つまらない心配をさせまして……もう……私のような者は軍人の妻には……戦争の時の軍人の妻には……ならないもので、御座います！

若き妻

理想よ、自由よ、星よ、董よ、とノート片手にピンポンの手を止めての仰言は流石廿世紀と承はれど、高尚優美、ハイカラなどと口癖のやうに叫び合つて隣の友の背中を音の爲る程ボンと叩いて、は、と笑ふ、底髪の中に御國を思ふ人は少く、却つて天保時代とか、十九世紀とか、と口悪の若手に消無されて相手にもされない頭髪、雪のそれよりも清い老人に、大和魂は傳へられて、我が足の思ふ儘でないのも、腰の痛みに伸びないのも、忘れ果て、満洲の野に露營する兵隊さんは、此風に、此雨に、さぞ困しい事でありませう、花見なんかと洒落れては、兵隊さんに濟まないな、と寄れば、觸れば、其の噂さ。

若き妻

「大村さん——此間の積金は何うなすつて？」

「あれ——、あれはね、伊藤さんが日曜に被入つたので、みんな奢つて終ひましたわ。」

「私もよ、丁度土曜の夕方三橋の糊工場へ行きましたら、そりやあ、良く出来た洋装の美人の繪葉書がありましたから、十枚斗りと、それに薔薇の髪挿の、珍しい程葉の良いのがありましたから、積金で買つて來ましたのよ。」

「ほ、>>>お互様にねえ……私は、又貴女は、必定獻金なすつたと思つて居ましたの！」

「いやよ、私家のお婆さんとは違ひますからね。」

「貴女のお婆さんは、まあ、そんなに忠義なの感心ですね。」

「はあ、随分、忠義者なんですよ、まあ、聞いて下さいまし……。」

「……大村さん、まあ面白いんですよ、家のお婆さんは、若い時から芝居が、何より大好なので、すよ、ですから、手も足も利く今の内に、芝居へは、毎月、被入いッて、お小遣をあげませう、するとね、お婆さんはね、兵隊さんのことを、思ひやつて、みんな勝袋を買つて送つてるのよ、それに、この頃は牛乳まで止して、了つて、其代を獻金するなんて、い勢なんですもの、まあ、驚くぢやありませんか、そして、家のお婆さんは、何でも、私なんか、に、どんなことでも、出来る丈けのことは、節儉して、一厘一毛でも、獻金するやうにおしと、毎日、耳へ、豚脂の、いるほど、云ふんですよ……。」

「あら、さう、貴女のお婆さんは、随分忠義ねえ、だけどそれも考へものよ、何故つて云ふのに、貴嬢、戦争が始まつてから大變に税が高くなつたんですつてね、だから、お父様が皆それを負擔して被居るんですもの、まあ、云は、私達も税を納めて居ると同じね、だから、私達は戦争には關係なしで、勉強して居る方が却つて良いでせうよ。」

「全くね、私も始めはお小遣も使はないで、恤兵部へ獻納しましたがつくづく考へて見るのに、人各々なんて……オホ、……と云ふと、厭やに、演説めくけれど、人民が自分自分の職業を勵めば、矢張り兵士と變りはないんですからね、農夫は農業に精を出し、商人は商業に力を盡し、私達は又私達で勉強をすりやあ、良いわ。此間の試験の時なんか、随分金鵝勳章位貰つたつて良い位だつたわ。」

「實際ね。幾日だつたか、さう、二十三日の茶話會の後で、伊藤さんが例の調子で、井を鑿つて飲み、田を耕して食ふ、帝力何ぞ我にあらん哉、なんて、柄にもない、漢文を謠つたので、明日、先生に大目玉を戴いたのよ。」

「面白い方ねえ。」

「本當よ、日本ぢやあ、少し勝てば、勝つた勝つたつて、顛倒返るやうな大騒ぎをやるけれど、大國民の襟度ぢやあないわね。」

「我家のお婆さんなんか、どうせ駄目よ、此間、私がそんなに號外なんて騒ぐのは、お止しなさい、外國人に笑はれるからつて云ひましたら、大變に御機嫌を損ねて、赤鬚なんぞに笑はれたつて、關はない、赤鬚が日本、の眞似でも出來やうものなら、豪いものだ、なんて云ふんですもの、

私冷汗が出ましたわ……毛唐だの赤鬚だのつて昔の人は仕方がないねえ。」

「本當に無學な人は話せないわねえ。」

と云ふ尾に躡いて此方は思ひ出したかのやうに、

「あゝ夫はさうと可笑しな話があるのよ家のお婆さんに付いて——」
「なにそんな可笑しい事つて？」

「え、面白いのよ我家のお婆さんが戦地へ送つた勝袋は前後で都合さうね五十袋位になるでせうよ。それでね、始終お禮の手紙が来るのよ、それが何よりも楽しみなんですつて……するとね、なんと云ふと又……おほ、おほ、お伽噺のやうだつて貴嬢に笑はれるけれど、先月の始めに例の通り満洲から手紙が来たのよ、それが随分滑

稽ねえ斯うなのよ私餘り可笑しいから既う諧記したわ……。」

許せ、未だ面をも知らざる、我が心中の妻よ——荒涼なる満洲の野の凄然たる月の夜に無聊の我が身を慰めくる、情深き人よ——
我は御身を優美なる高尚なる心の優しき婦人と思ふ、暫し宿貸せ雨が降る、一樹の蔭も他生の縁と聞くに、まして我は御身の温き勝袋に接したる事、二回始めはたい好な烟草に喜びしが、次はほとほと奇遇に感じぬ。尊き神の引き合せ……我は御身を雪よりも清き、未婚の處女と考ふ。幸ひに悪運強きか、武運拙きかして再び都の春に、旗章花の下杯を手にするを得ば、雅なる御身に、會ひ遇ふを得ん、其時は不才某の妻たるを肯じ給はらずや、又我望のやうに、露の軍を切つて、断つて、断りまくり、花々しく討死して、死んでも死

なぬ人となり、靖國の社に祀らるゝ事もあらば、御身の白く玉のやうなる手より、香華を手向け給はらずや。あゝ、若き我妻よ、許せ我が幸ひの若き妻よ、心あらば、我身に一枚の寫眞を惠まれよ、朝に夕に、殺伐なる陣中の愛を慰めん。

滿洲の陣中に於て

某

お高殿

まゐる

「……斯う書いてあるのよ。」

「あら——随分滑稽ねえ。」

「全くだわ。だけどね、字なんかは驚く程上手いのよ。お婆さんはね、

屹度豪い、それはく面白の方だらうつて云つてるのよ、でも八十歳近くになつて、若き妻なんて云はれちやあ、枯木に花だわ。」

「ほゝゝゝ、寫眞を送つたらどうでせう。」

「ころげて笑ふでせうよ。」

「ほゝゝゝゝゝ。」

「ほゝゝゝゝゝゝ。」

「丸で喜劇ねえ。」

(以上三十八年六月)

三月晝

花 吹きまくる 朝嵐、
鶇 驚く 水の上。
墨田の堤の 春 盡きて、
有明 残る 待乳山。

若き妻

兎

士官の妻

(上)

「唐郷艦隊。」

と少しの淀みさへもなく、如何にも肩身が廣さうに、一座を見廻して答へたのは、色は至極黒いけれども衣服態度のなか／＼立派なハイカラ的夫人で、癖として話の中に手を額に衝る其度々、指の幾本かに、ダイヤモンドがきら／＼と輝いて、胸に巻き付けられた黄金の時計の鎖と、相映するのであつた。

「まあ、御名譽です事ねえ。」

隣席の令嬢は、今更にハイカラ夫人を見上げた。

「本當にお羨しい事ねえ。」

五六人の夫人は、一度に斯う叫んで、好意を表した。

ハイカラ夫人は愈々傲然たる様で、

「私は何うせ最う再度面を合せやうとは思ひませぬもの……私は何時でも手紙の度に花々敷い戦死を爲るやうに、左様云つて遣りませぬよ。」

「本當に貴女は、お蒙いのね。」

「私なんぞは、とてもそんな事は出来ませぬわ。」

「貴女は別ね。」

と口々に感じたらしい語を發した。

「竹内さん、貴女の御良人様は？」

突然にハイカラ夫人は、思ひ有り氣な沈み勝な餘り口敷をきかずに謹
しまやかに控へて居た一人の美人に尋ねた。
美人は何の答へもなく唯俯伏してしまつた。

「あゝ左う左う竹内さんの旦那様も戦にお出成すつたのねえ。」
先の令嬢は合點の行かぬ様子で美人の面を見たのであつた。

「何の艦隊！お話し遊ばせな。」
皆々膝を進めて促した。

「は……。」

と美人は尙躊躇つて、愁し氣な花の顔を上げた。ハイカラ夫人は、愚圖
愚圖して居る人よと云はぬ斗りに、一寸額に八の字を寄せ、

「えー竹内さん、何艦隊……私だつて話したぢやあ有りませんか……」

……殊に、貴女の御良人様は、お若くつて大尉に迄もお成りになつた
のですもの……ねえ皆さん其のお働さに注目しなくつちやあな
りませんねえ。」

「本當——竹内さん、斯う云ふ時に御自慢遊ばせよ。」

曾て學生時代から竹内夫人の美しさと學藝の勝れたのを羨んで居つ
た夫人達は、今又竹内大尉のやうな有望な人物に嫁いだのを、岡焼半分
益々烈しく詰つた。

「御免遊ばせ。」

と徐に立上つた柳の腰を、ハイカラ夫人は押へて、

「竹内さん、そりやあ貴女失禮でせう……中座なんぞを成すつちや
あ……。」

「あの少々気分が。」

實際急に気分も悪くなつたのであらう心細氣に、口の内で幽かに云つたのを、わざと聞えぬ様な顔を仕て、

「殊に貴女も幹事ぢやあ有りませんか……我儘を成すつちや困つてよ。」

汗を拭ふに紛らした竹内夫人の手巾に、一雫の苦しい涙が注がれた。

(中)

去年に増した暑さにも、竹内大尉の書齋斗りは、風流に作りなした杉松など、緑蔭深く立ち籠めて、夏は何處にと云ひ度げな風情である。

垣を頼みに、一輪二輪咲いた朝顔も、淋し氣に主の留守を啣ち顔だ。

君子は、読み差した新聞紙を物憂氣に机の側に置いて、じつと水を打つ

た敷石を眺めた。

「あ、詰らない浮世……私として人だもの、殊に心弱い女だもの……

互に想ひ想はれて、漸う嫁入つてから、未だ半年に成るや成らずに

……戀しい夫は出陣……御國の爲とは云ひながら……何で

悲まずに居られやう……出陣なされては、最う再度とはお目に係

れぬ覺悟だもの……。」

數へ年で漸う十八に成つた斗りの君子は、房々した髪を可愛らしい丸

鬘に結んで、赤い手柄何となく未通らしく、ふつくりとした白い頬に少

し瘠せの見えるのも、夫の身の上を心配した故であらう！

「此んな苦しい悲しい思ひも……御國の御爲君の爲……軍人の

本分を盡す時と……嬌然笑つて、花々しいお働さをと……云つ

て御別れした彼の時の私の心……心弱い愚癡な女と人は笑ふか
も知れないが……私は虚言のない本當の心だもの……今日は
花々しい御功名若や又明日は名譽の御負傷と待つ甲斐もなく……
あゝ吾夫の艦隊は不運な事はかり打續いて……此間も實家の
弟にまで……姉さん……姉夫さんの艦隊は失敗つて斗り居て
僕は友達に肩身が狭い……と言はれた時の心苦し……」
机の中央に置いてある軍服姿の悠然として星の眼を輝かせて少し笑
みかけた夫の寫眞を恨めし氣に又何とも云へず懐し氣にじつと見詰
めた。
「昨日は殊に……女學校の校友會で……斷つたのを是非にと頼
んで連れ出し……あゝ此れも私が足りぬ故……だが餘りな大

島さん……我夫の屬いて居る艦隊は良く知つて被居るくせに……
……あゝ情ない。特とあんな切ない思ひをおさせなさるのなもの
……世間で種々の取り沙汰をするのを聞けば女でさへ腹が立つ
て口惜しいものを……まして我夫は何んなに思つて居らつしや
るか知れやしないあゝ情ない廻り合せだ……」
悄然として又新聞紙を眺めて吾夫の所屬艦隊の事を冷笑的に書いた
記事の處に恨みと愁ひとに充ちた眼を留めた。

(下)

「後でね私——竹内さんは神村艦隊に屬いて被居しやつたのだと云
ふ事を伺ひましてね……昨日は悪い事を爲たと思ひましてね……
今日は態々お詫に上つたのよ。」

憐じやうに下目で相手を盗み見た。

お詫びなどと氣味悪き言葉は、尙ほ一入に君子には辛いのであらう！
君子は黙然として身動きだにせぬ。

「然しね、お身體には別條はありませぬわ……彼んな艦隊に被居ると。」

無禮な一言——餘りと云へば、我夫を侮辱した皮肉な言語と、平生は眞に女らしい君子も、憤然として紅葉した面を上げたが相手に爲まいと云つたやうに、又首を垂れた。

「我夫なんぞは、貴女ね……此間負傷致しましたのよ……でね——昨日金鵝勳章を頂きました——夫れから昇進も致しましたのよ……ほ、>>>夫れでも、未だやつと大尉に成つた斗りですもの、貴

女の御良人様には、名譽の負傷をしても及びませぬわ。」
と名譽の負傷に力を入れて、貴女の夫よりも豪ひと云ひたげだ。

「でも郵便などは、良く寄越しますのよ……最う一度立派に働きますとね——今度はおほ、>>>貴女の御良人様からはお便りが有つて？」

君子は唯頭を振つた。

「まあ……矢つ張り、面目なくつて居らつしやるのでせう……私の従兄なども、彼の艦隊なので、少しも手紙を寄越しませぬの、本當に氣の毒ですよ……新聞など、ぢや云ひますが、まさか晝寐をして居た譯でも有りませぬよ、ね、竹内さん。」

口惜しさと悲しさに、唯涙含んだ君子は、答へも何にも無い、それをいよ

いよ下すんだやうに、

「私は我夫が討死しても、涙一滴漏すまいと覺悟して居ますから……
下らなく、くよくよとは案じませんよ……唯名譽さへ傷けなけ
りやあ何う成つても構ひませんわ……だが神村艦隊も何うかし
たら良ささうなものね——氣が利ない。」

と大島夫人が私語いた時けた、ましい號外の聲が聞えた。
二人一時にぎよつとして、振向いた時に丁度下女がいち早く一枚の號
外を差し出した。

君子の眼は忽ちに二號活字をもつて記された竹内大尉といふ文字を、
見るや否や火の如くに輝いた。

號外の記するところは敵國艦隊が某海峡を過ぎんとするに對して、我

が〇〇艦隊は大に勇奮追撃し、敵艦隊をして殆ど戰鬪力なき迄に至ら
しめたが、中にも〇〇艦の竹内大尉は、身に重傷を負ひたるにも屈せず、
最大口径の砲を以て勇戦し終に敵の一大艦を轟沈したといふのであ
つた。

君子は大島夫人の傍に居るのも忘れたやうに、號外を面に當て、咽び
泣きに泣いたのであつた。

あゝ嬉し泣き——嬉し泣き——是れが眞の嬉し泣きであつたらう！
やがて心が沈まつたやうに、肅然とした然し晴やかな美しい面を仕て、
呆れて見成つて居る大島夫人に號外を示した。

「大島さん……。」
と感極つたやうな、然し矢つ張り沈んだ音調で、如何にも女らしく、頬を

傳はつた涙を拭ひもあへずに呼びかけた。
 大島夫人は無言であつた、然し其の眼には既涙が潮して居た、それは言ふまでも無く、吾が夫の負傷の報知を得た時の、我が悲喜一齊に迫つた胸中の無限の感じと、同じ感じに今打たれて居るところの、竹内夫人の心の中をば、思ひ遣つて争はれぬ女性の本然の柔婉しい性に立反つた一瞬から湧き出した同情の涙で、同じ軍人を夫に持て居る同じ婦女の、夫の職分を思ふ意氣地と、夫の身の上を思ふ愛情との、一團になつたものの強い感じは、蓋し誰も彼も同じことであるからで有らう。

袖しぐれ

嬉しいなどとは愚な事………なんでこれが言葉などに盡くされませう！若し私の心の内を割つて御目に懸けられるものならば惜しくも御座いませぬ此の命、「成程、軍人の妻の胸の内は、斯うであるか。」と申す事を、皆様に御覽に入れて、責めては共に喜んで戴き度いと存じます。が人の身の情なさ、嬉しいに付け、悲しいに付け、唯湧き出るものは色も香もない涙ばかりで御座います。
 忘れも致しませぬ、去年の彌生のなかば、朧に霞む春の夜の月を、訣別の杯に受けまして、「來年の今夜は、靖國神社に櫻を眺めるのであらう？」と門出の宴の勇ましく、「百合子！無事に。」との言の葉は、今も尙ほ私

袖しぐれ

の耳の底に残つて居りますのに……。
あゝ浮世——何事も浮世の常とは申しながら思へば口惜う御座いま
す……。
照る日の神はありながら……何故公平には照さないの御座いま
せう！
不運とでも申しませうか！弱年の大尉では兎に角有望の中に指を屈
せられました良人の門出の時のその喜びは春の淡雪と跡もなく恨み
重なる露の軍を唯の一度も破らずに残念にも残念にも常陸丸の最後
と共に深い——怨恨を玄海の灘に止めたので御座います。
斯やうな事を申しましたならば愚癡な女とお笑ひも御座いませう
が虚偽のない私の心の内は……春の花秋の月も良人を愛しと思へ

ばこそ眺めても面白くも感ずるので御座いますか……此れが責め
て平生の志を貫いて花々しい戦死でも致しましたのならば軍人の妻
たる私元より最初からの覺悟で御座いますから女々しく泣きも歎き
も致しませんし又毫の心残りも御座いませんが……。
あゝ何某中尉は敵を十數名断り倒した。何某少佐は部下を指揮して、
抜刀隊で切り込んだなどと皆様方の御功名を承ります毎に……良
人がもし武運目出度戦に参加んだ事が出来ましたならば他の方程に
は及びません迄も望み通りにさぞ——軍人の職分を全うしたで御座
いませうに……惜からぬ私の繊弱い身はおめ——と永らへて……
：國の爲君の爲にと心身を鍛えに鍛えました良人は……まあ何と
云ふ無念な最後を遂げた事で御座いませう。

袖しぐれ

もし人と云ふ者に靈があるならば常陸丸で、無念な最後を遂げた勇士の思ひで、筑紫の海の底深く憎い憎い敵の軍艦を撃ち沈めさせるやうに、と明け暮れ祈りまして新聞の聲を聞きますと、其儘第二ページの二號活字に眼を注ぐので御座います。

さしも世の人の口に乗りました常陸丸事件も何時とはなく忘れられまして紅葉は散り、蟲の音は哀れになり、木枯吹き荒ぶ物悲しい冬も何時しか過ぎて行なして、良人が手植の白梅は、主なきことも知らぬやうに雪間を分けて、清い香を放ちました。が玄海の灘に夜な夜な鬼火が燃えて、勇士の怨恨の聲が静けさを破ると云ふ事は耳にしなかつたので御座います。

御國の花は、一夜の嵐に散り失せまして、杜鵑が雲井に啼く頃ともなり

ました。

三年の契りにあかぬ別れを致しました、良人の位牌は、百日百五十日と経ちましたも、尚ほ先祖の佛壇に合せ祭る事は出来ないの御座います。……白布の懸つた床の祭壇を片付ける其の時は、良人が改めて亡くなつたやうな氣が致しまして何時迄も飾つて置きたいので御座います。恐らく他の方々も斯うであらうと存じます。

どうぞ、一週忌迄には、勇士の魂の死しても、なほ御國を守る忠義の程を、畏多くも上は一天萬乗の君より、下は草薙る賤の女に至る迄も、知らせたい、知らせたいと、甲斐なき手を合せました事は、日に幾十度で御座いましたらうか。

梅雨に入らうとして、いやに蒸暑く頭を抑へつけられますやうで、其の

心地の悪さ、夕の鐘は、ぼんんと哀れに、いと胸の想を増させるので御座いました。が、忽ち聞えるのは、號外の聲で、滅入りさうな私の耳に、痛くも響きました。なので御座います。

私が軍に熱中して居りますから、見やう見真似で下女のお竹も其通り、あたふたと號外を持って私の居間へ参つたので御座います。私は取る手遅しとばかり読み下しますれば、日本海の大激戦……號外を握り締めました儘、思はず「貴郎」と叫びまして、位牌の前に示したので御座います。けれども「愉快」との、只の一言さへも被仰らないので御座いました。

私は両手を合はせまして、祭壇の前に跪き、暫し伏し拜んだので御座います。どうぞ靈があるならば、常陸丸の恨みを残した彼の海に、敵の艦

を、一隻なりとも所天の御手で葬つて戴きたう御座いますと。

夜に入りましてから、第二の號外は参りました。我が海軍大勝利との。あゝ、玄海の灘、玄海の灘、私は此夜の夢に、良人の花々しく、打ち働かれる所を目撃致しました。又、敵艦の沈み行く哀れな最後をも目の前に見たので御座います。——良人は全身朱に染みまして、どうと斃れましたと思ひます。夢は果敢なくも覺めたので御座います。

待ちに待つて居りました新紙は、寐床を離れますと直ぐ下女の手から運ばれました。私は無言で受け取りまして、平日のやうに其儘良人の位牌の前に端前と坐りました。さうして、小さな聲で、嚴に海戦の模様を読み始めたので御座います。

私は良人が亡くなりました。してから毎朝これをお務として致して居るので

御座います。人間と申しますものは、迷信の深いもので、何となく良人が聞いて居りますやうな気が致しますので御座います。

さて、戦況はまあ何と云ふ立派なこととせう。敵艦すべて三十八隻の内撃沈二十隻、捕獲五隻、それから敗残の十二隻は滅茶苦茶となつて逃走して丁ふた二隻の外、みな戦闘力を失なつたといふこと。

それに敵の司令長官までを捕獲した……しからは、我が海軍の損害は如何にといふと、それは殆ど無いといふ位で軍艦といふ軍艦は一隻も沈まないといふ、妙不可思議……否、妙不可思議ではありませぬ。天祐とは正に是れでせう、まあ何と云ふ立派な事で、虚言のやうな大勝利……。

私は、いつも新聞を讀みまする毎に、いつも胸が痛み、口が噤んで來まし

て眉が皺んで、眼が濕むで來るのですが、今日は初めて、良人が亡くなつてから初めて、何とも云へぬ宜い心持となつて平日のやうに聲も淀まず、朗々と讀み上げたのでございます。

元より、この大捷利、これは天祐のそれとございませう、東郷さんのお偉いのでございませう。が、まかし私から斯う申しますれば、慾目かも知りませぬが……良人と共に常陸丸で、無念な怨みを呑んで海に沈んだ方々の亡霊といふものが、その幾分か、我海軍の捷利を助けたのではあるまいか、との斯様感じも致すのでございます。

兎に角、私は此の世の中に、人間の靈魂といふものが、不滅であるといふことを確に、現實に認めたいやうな心持が致すのでございます。私の良人と常陸丸で運命を共にしたお方の家族の中で、さぞ私のやう

袖しぐれ

な感じをなさつた方も少からぬことであらうと存じます。

若き尼

昨日の春の夢さめて、

櫻に渡る青嵐。

昔を忍ぶ墨染の

夕の空にほととぎす鳴く。

○

酒の機嫌の千鳥足、

月は上らぬ宵闇や。

地藏の辻のぬかるみに

口三味線の糸が断れたり。

戀？愛？

一

「厭で御座います。」

と強い力のある聲でさつぱりと言ひ放した雅子も流石に首を垂れずには居られなかつた。

「雅さんは名譽と云ふ飾をしやぶらせられたので未亡人といふ名に戀々として居るんだ。」

と欣一は嘲るやうに態と落ついて軽く笑つて見せたけれど何を考へて居るのか雅子は唯黙つて居る。

夕暮は次第に二人が戀の紀念の銀杏山の黄金の敷物のやうに見える

戀？愛？

落葉の裾からして世を包んで行く。

両方とも暫く無言であつたが、やゝあつて欣一は、

「雅さん。」と響のある凍とした聲で呼び懸けた。

「はい。」と氣の無さうな臆したやうな返事を聞くと等しく不満で堪らないと云ふ風はしたものの無理に押へて優しくわが妹を悟すやうな調子で、

「雅さんは今世の中の哩々連と一所に心が迷つて居るのだから後前をよく〜思案する暇もあるまいが、じつと心を沈めて未來を考へて御覽。今こそ花の都でも片田舎の國民でも軍人の遺族と知ると、美しい同情を寄せて眞實に盡してくれやう、又花のやうな若い未亡人と聞くと、云ひ知らぬ涙に咽びもしやうが、それも本の二年や三年

の間で御兩親も世に亡なられた五年の後十年の後誰が誠心から尋ねて呉れやう！誰が相談相手になつて力になつて呉れる人があるだらう！大きなお世話かはしらないが僕はつくづく兄弟もない雅さんの今後を心配せずには居られないので、雅さんは一體どう云ふ考を持つて居るのか案じられてならないのさ。」

と一句一句雅子の胸に染み入るやう、三年餘りの月雪花に戀し懐しと契り合つた深い想ひの袖を絶つてから此方變り行く自分の姿を誰れ振り向いて呉れる人もない昨日今日尙昔の誓を其儘心を盡してくれる欣一の情には堅き心の雅子も動かされぬ譯には行かなかつた。

「世の變遷が早く思ふやうになる時もありましたら心ず銀杏山の名

戀？愛？

金

を辱しめないので頂戴。」と縫付いて泣いた其時も思ひ出されて、まよと云ふ考へにもなる。

「ねえ雅さん、僕は雅さんが川崎夫人に成らない前に此の銀杏山で一度遇つた時の欣一と少しも變はない、相變らず身命にかけて雅さんの柔弱い身を案じて居るのだ。」と欣一は愈々熱心な言葉をつづけるので、

「欣一さん。」

と雅子は聞くにも得絶ないと見えて哀みを乞ふやうに、

「もうなんにも被仰らないで……。」

とほろりとして袂で眼を蔽つた様子の儘に思ひ込んだ事のあるであらうと推しはしたものの、斯程迄に長の年月よし無情き浮世に恨みし

にもせよ、花に慕ひ月に戀ひ其人の身を案じ暮した自分につひ斯う斯うと打明けて呉れぬ口惜しさもあり、又どうやらした拍子には「貴夫」と迄恥しさに忸怩かんで口籠つたことのある雅子が自分に何となく隔てるやうな風も見えるので心憎くもなり忌々しうに立ち上つて弛んだ兵兒帯を締め直した。

(二)

憂に寢れながらも尙ほ十人並に勝れて愛嬌のある女らしい面を凝然と見下した欣一は、思ひ惱んだ雅子の姿が細りと何だか影が薄いやうにも見えたので、哀れになり袖を引いて離さぬまゝに又傍の銀杏の根の雅子が心盡しの絹手巾の上に腰を下して淋しさうな相手に寄り添ひながら一心に耳を傾けて其話を漏さじと聞いて居る。

雅子は艶めかしい人を引き付けるやうな聲を沈ませて幻を追ふやうな邪氣ない調子で言葉を續けた。

「そろわの時は丁度其の老松の梢に三日月が淡く光を投げて静な丸で油繪のやうな晩でしたねえ、何事も浮世だ雅さんもうお泣きでない、僕も思ひ斷つた。」と立派には被仰りながら欣一さんも固く握つて下さつた私の冷い手の上に熱い涙をほろりとお落しなすつたんですもの、「私しやあ此儘石になりたい。」つて貴郎の身體を動揺つて泣きましたわねえ。銀杏の葉は風のないのにちらちらと散つて染み入るやうな鐘の音は名残を引いて長く響きましたわ、さうして鐘を數へて被入つた欣一さんは「あ、もう大分夜も更けたやうぢや、それに何時迄斯うして居ても斷念られないんだからねえ雅さ

ん歸らうぢやわないか。」つて私の手を引いて銀杏山を下して下さいましたのね。私は力もなんにも無くなつて終つて自分の身體だか人の身體だか別の付かない空蟬の藻抜の殻を欣一さんの右の腕に支へられて引きづられて行きましたの、「雅さんとの樂しかつた夢は破れてしまふのか。」とつくつく身を切るやうに被仰つた貴郎のお聲で私は始めて家の近所へ來た事を知りました位、「もうこれが一生のお別れねえ——。」つて身を揉んで聲のあらん限り前後も忘れて泣きましたわねえ。その時私しやあ私の顔を埋めて居る欣一さんの胸がどんなに烈しく掻き撈られるやうに騒いで被居つたかを知りましたの。「雅さん、それやぢあ別れやうね。」と欣一さんも男らしく被仰るし、私も「え、」と領きはしながら離れともないの

戀？愛？

で、身體は却つて一個のやうに固く結ばれて離れやうもとせません
でしたけれど、平生は憎くも思つて居たボチの聲に驚かれて「も
しもの事が御座いましたら屹度お花をねえ。」つて互ひに別れば別
れましたけれど、矢つ張り一間と間を置かない所にぼんやりと立つ
て居ましたのね。其時の天地は唯雨上りの月がおぼろに霞んで、一
ト入に昔の忍ばれる景色でしたわ。で二人は堪へる事が出来ない
で、縫付いて終ひましたの、「雅さん」つて欣一さんもしつかり手を
握つて寄り添つて下さいましたのね、又上野の鐘は時雨れるやうに
梨地の空に響を殘しては消えて行きましたわ。すると欣一さんは
何をお思ひなすつたか急に私の手を振り解いて一散に情なく去つ
てお終ひなすつたのねえ。私はもう「堪らなくなつて塚に投付

かるやうに嘔り付いて氣も狂つて終ひさうに咽び入りましたの。
夜はだん／＼寂として来て寒さは強く身に染みて一入悲しさが増
しましたわ。暫く經つと門の小門が開いてお八重下女の名が私を
迎ひに行く處だつたつて出て來ましたから、仕方なく今歸つたと云
ふ風に見せて、玄關が闇かつたのを幸ひ部屋へ泣きに行きましたの。
欣一さんに御目に掛つて熱心なお言葉を伺ふ迄は、あらぬ名を世に
誦はれやうと思ひ定めて、跡の見苦しくないやうに奇麗に整理して、あ
の拜借した一葉全集の始末やら、枝折の見本の主やらを書きつけて、
床の花瓶には態と白菊の一輪挿やがては自分の哀れな木碑の前に
悄然と今を忍んで咲いてもくれよと涙ながらに見返つて出て行き
ました部屋は、夕方とは僅の間に痛く變つて賑々しく、金糸入の華美

戀？愛？

な丸帯耕地の亂菊の函迫やら優美を専らな紋付やらが幾重とはなく四疊半の部屋も狹さうに積んであつて見るも忌々しい風情でしたわ。私は胸がかう張り裂けさうになつて中で一番さうな曙染のお振袖を手巾の變りにして袖や裾をびつしよりと泣いて泣いて泣き倒れて涙で絞るやうにして遣りましたの。」

(三)

「宅は私を理想の女だ。」つてそりやあそら恐ろしいやうに愛して居りしたわ。」

と雅子は箒のやうに一葉さへもなくなつて立つて居る銀杏の大樹を見上げたが幽な嘆息は自然に漏れたのであつた。

「だけど私は忠實な妻ぢや勿論御座いませんでしたの。さうして暇

さへあれば欣一さんの事ばかりを考へて居りましたわ。それに家庭はそりやあ平和で小波一つ立ちませんの思へば忘れもしない二月の一日の夕方で御座いましたわ私は相變らずぼんやりと縁の柱に靠れて樂しかつた銀杏山の昔を夢のやうに辿つて居りましたの。すると一杯機嫌の宅は外から歸つて来て矢つ張り縁に庭を眺めて居ましたわが雪にも萎げず凜と咲いて居ります白梅と枝折戸の傍に悄然と首打垂れて居ります海棠とを指しまして、「梅と海棠とは何方が好い。」と莞爾しながら尋ねますの。私は無茶苦茶した折でしたから何んとも云はず黙つて唯宅の顔を見詰めて居りましたの。宅は聞えないとでも思ひましたか、「僕は梅が大好きだがお前は海棠か。」つて軽く聞きますの。私は何んだか何時も元氣の良い宅

が欣一さんと比べて憎らしいやうな気がして、「梅なんぞ大嫌で御座いますわ、一人で枝を張つて威張りくさつて、それよりも海棠の姿れて世が思ふやうにならないのを歎いて居るやうな風の哀さが可愛ゆくつて大好で御座いますわ。」と懊惱たやうな調子で、自分にも譯が分らない位情が激して涙を蓄めて海棠に肩を持ちましたの。宅は少しはむつとすると思ひのほか、「雅子は情的だな。」つて却つて愉快さうに見えましたの。總べて自暴になつてるやうな私の風が一から十迄宅には氣に入りまして、時々は流石の私も後悔する事が御座いましたわ。それでも日に日に銀杏山の哀れな夜が戀しくなり、欣一さんのお寫眞に接吻が繁くなるばかりで。」

「是非との所望に進まぬながら調べ澄した想夫戀の曲だつて心の飽く迄も可笑しくなつて居る私は、門出を祝ふ名残の宴に宅との別れを惜しんで誠心が籠つたんぢやあ御座いませんでしたわ。此の花の春の夜を啣ちながら淋しく机に向つて被居る欣一さんの爲に、せめては此の琴の音を心ある松風に通はせて、結ばれ勝の心の一端をも解き絶えて久しき花の盛に酔うて陶然となさる面影を思ふより外御座いませんでしたの。涙は自然にはらくと爪先も見えない迄に散りますし、聲は胸の苦しさに曇りまして丸で音調は亂れて終ひますの。それでも心の極く快活な宅は疑と云ふ男らしくない事はつゆさら浮びませんで、「お前の琴の音を身に染めて、はつは、は男らしく一つ運試をやつて見やう。」つて、其翌日の朝軍服姿勇ま

戀？愛？

並

しく出立致しましたの。其後姿を見えなくなる迄見送つて居りました私は振り返りもしない潔い影が春霞に隠れて終ひますと、一種云ひやうのない感に打たれて立間に泣き倒れて終ひましたの。だけど銀杏山の晩の悲しさとは違ひますの妹が兄さんに別れた時のやうに……。欣一さんの事は夢の間も忘れる事はなかつたのですけれど、矢つ張り宅も方に思つて居りましたんで御座いますわねえ。それでも筆を持つと「欣一様ある」と書き度いので……。全く心の奥の奥の底は自分でも分りやあしませんでしたわ。陸軍部内では鬼大尉と渾名を取つた宅でも夫婦の情に引かされたと見えて、思ひを封に込めた手紙を殆んど一戦争の終り毎には寄越ししましたの。それを私つてば二度の温い手紙には極く短い冷やかな文

を一度しか返しませんでしたの。今になつて考へればボチにも劣つた私で御座いましたわねえ。」と。

雅子は口惜しさうに言葉に力が這入つて来る。

「征衣の袖にしとくと雨の降り注ぐ満洲の荒涼たる夜を思ひ消え消えに瞬く下宿の二階を戀ひ慕ひ假寐の夢も思ふやうには結ばず肺にでも懸つたのではないか知らんと危ふまれる血の出るのを結句死ぬのがうれしいやうな氣もして何を考へるともなく恍惚となつて居ますと、「奥様」つてけた、ましい下女の聲呆れながら持つて来た號外の二號活字に眼を注ぎますと、夢ぢやあなく本當に——宅は戦死して終ひましたの。「あらつ。」と眼を見張つたぎり私しやあなんだか氣拔のやうになつて暫く俯伏して居りましたわ。宅が

戀？愛？

老

出征した後でも別に淋しいとも心細いとも感じませんでした。けれど戦死と聞いてからは「最う此の世に無い人。」と考へますと戀しくて戀しくて欣一さんにお別れした時よりも結婚の夜よりも百倍も悲しく意氣地なしたの分らずやになつたつて人に笑はれる程涙が溢れ出します。満洲軍の凱旋なんて世間の喜びを聞けば聞く程辛く當つた亡い人が懐かしくつて慕はしくつて供へる線香に我が身を削り交せて早く烟となつて消え失せ度い願で御座います。前には嫌つて嫌つて嫌ひ抜いた其人が今ぢやあ、惚れて惚れて死ぬ迄に惚れ抜いた欣一さんよりも千倍も戀しう床しう御座いますわ。」

と雅子は濕つた顔を上げて欣一を仰いだ。

泣いて下垂る枯柳は獨哀れに、夕風に枝を弄られて、千年經りたる松の老樹も語らず、掠め行く鳥も物言はず、無言の空に聳え立つ五重の塔、天王寺は唯寂寞と。

油風 吹く 春の曙、
霞の裡に 舟を止めて、
櫻鯛 釣る 海は静けく、
一升の酒 振るに音なし、

戀？愛？

海老茶氣質

義姉妹

(一)

西隣に稷々と聳え立つ銀杏の大樹、一度は柔い秋風に誘はれて、黄金に色付いた葉も、今は名残なく落ちて終つて丁度箒の様になり、ビュービューと冷い風が音づれる毎に寒さうにふるくと顫へて居る。師走の太陽は忙しさに駈足で上野の森に近づいて、ペンキの臭も未だ取れぬ教員室の南を光薄く照して、肉色の外部を代赭に見せてゐる。一ツづつ煉瓦で疊んだ七ツの花壇に、花といへるやうな花は殆どなく、唯末になつた白菊が、一輪悄然と首打垂れて、咲いて居る斗りであつた。

化粧室の横手から飛び出した十五六の色白な紫式部は、其の間を真直に縫つて、左に折れ、二三段の階を造作もなく、一寸右手で袴の膝の邊をつまんで馳け上り事務室に沿つて、右に曲らうとしたが、急に、一足跡に退つて、

『あら驚いた。』

と、叫んで切の長い可愛らしい眼を、充滿に見張りながら、動悸を數へるやうに胸に手を宛て、『はあ、はあ』と息を喘ませた。同時に、色の珍しい程、黒い口は、蝦蟇よりも大きくはないかと思はれる位な憎々しい海老茶袴は、猫に似た背を一層丸めて、『ぬつ』と顯はれ出て、未だ驚きが止まぬ、友の肩を上から抑へ付ける様に抱へたのであつた。

「田川さん。」

と充血した様な齒齦を惜し気もなく露出して、げら〜と如何にも下等に笑つた。

「夫んなに驚かなくつても、良いぢや有りませんか、末松さんにでも衝き當つたんぢやあ、有るまいし、柔順しい方は、違つたものねえ。」

「あら良いわ、私——末松さんだからつて……別段に驚ろさやあしなうわ。」

「へえ——左様で御座いませうとも。」
と改まつて、御辭儀を仕ながら、厭に固くるしく節を付けて、

「ねえ——末松さんなら、取り分けて……。」
怒の源は知る由もないが、何しろ、容易ならぬ權幕に、平生内氣な田川は、

逆らはず出来る丈、面を和けて、

「大友さん……そんなに被仰しやらないだつて……え、何んか私
が、仕て？そんなら、御免なさい。」

口ごもり、口込もり、相手の氣色を伺ひながら、云ひ断つて話を他に轉さ
うと、苦心した。

「左様云へば、大友さん、貴嬢此間の、日曜に末松さんと、御一緒に、白馬會
に、被行しつたでせう？」

「え、行つてよ、行つたのが悪いの？」

(二)

優しくすれば、する程、付け上つて、兎や角と無理を並べる大友を、田川は
始終女らしく、微笑を浮べて、迎へながら、

「私唯お羨しいと思ひましたのよ、丁度此の間末松さんのお家へ上つたら、貴嬢と御一緒に上野へ被行たと伺ひましたから。」

「さう、それは、お目出度う。」

と、強くは言つたが、包みきれぬ嬉しさは、言葉の少し弱くなつたので、知られる。

「それ斗りぢやなく、大友さんね、末松さんの此の間の御手紙にも、貴嬢が大好だと書いて、有りましたわ。」

「え、つ、大好だつて、貴嬢も、流石、末松さんの御妹御よ、良く御仕込なすつたわ——良い加減の御世辭斗り言つて、何うせ、貴嬢の様に末松さんに、好かれはしないわ。」

田川は黙然として、靴先で砂利に末々と、數多度書いては消し、消しては、

書いて居たが、口角泡を飛ばして詰寄せる大友を下から見上げて、口を開かうとした時に丁度、

「田川さん。」

と、赤面の下女下女した太田、瘠せた飢饉年の亡者のやうな山本、頸の短い意地悪の大原は、左右に立並んで、田川の周圍を圍んだ。

さうして、大友の冷笑、後に付いて、

「私は、又此間……大友さんが、末松さんと、白馬會へ被行しつたと、云ふから、又——何處かへ、行かうとお二人で、相談して、居るのかと思つたのに……つまらない……大友さん……何うせ、田川さんの様な、美しい、お嬢さんには、敵はないから……騒ぐのは、お止しなさいよ……ね——太田さん。」

山本は、虎の親戚とでも云ひさうな、藪隈の眼で、ぐるぐると四人を見廻して、白のリボンと配合の良い、黒々とした田川の髪のはらりと垂れた邊を、卑すんだやうに睨んだ。

「そりやあ、さうだわ……それに、私達は末松さんに對つちやあ、何んにも云へないけれど……田川さんには、雄辯になるんですもの……どうせ駄目よ。」

「でも、私しやあ、少し……嬉しい事が有るんだから良いわ。」

太田が、氣隙に言ひ切ると、四人は、顔見合せて、意味有氣に噴き出した。

「皆さん——末松さんが今度の番は、お出になるのよ。」

「早く、被行しやい、皆さん——ん。」

と、呼ぶ聲が、頻りに聞えたので、生徒は、ピンボンの手を止めて、東西の遊

戯室からばらばらと飛び出した。

四人は、田川の背を、音の爲る程、叩いて、

「早く、被入しやいよ。」

機に、田川は、よろぐと危く倒れやうとして、階子段の横に身を支へた。

「ふッふッ……」

と、氣味良氣に、手を連ねて、ばたばたと馳せ去つた。

(三)

「末松さん、勝て頂戴。」

白の後では、懸り合ひもない、二年、三年の生徒が、山を成して、口々に叫んだ。

「え、大丈夫よ。」

着物は、牡丹色の小紋袴は紫色なるを、活潑に短く穿き上げ、いよっさり
と、足を二本脛全體膝の邊まで出して、磨り断れた毛を、詫と爽然とした
やうに、額へ八の字に下げて、洗ひ髪で、頸窩の所に滅茶苦茶巻にした右
に大きな白薔薇の頭簪を挿し、皆んなに好かれたいが、充分で鬨はぬ風
に見せながら、顔には、御白粉眉には、お黒い口には、お紅を塗り付け給へ
ど、悲しや、色は午券の白和、口は丹波酸漿といふ有様、誠に御氣の毒な御
面相である。

然し、世は茶人の集合ラケット持つた、スタイルが、ハイカラだと、賞め
稱へる、聲は、沸くやうで、

「末松さん——ん。」

と、勢を付けければ、此處ぞ、我身の技倆を顯す所はと、サブの時には、體育會

流に、一寸身を捻つて、足を前方に上げ、受る時には、御茶の水流と、獨極め
して、秘術を盡くせば、流石、チャン揃の、赤も、敗色が見えて來た處を、白サ
ブの鋭い玉に打つけ、流しつ精神込めて、ラケットを、水車のやうに使
つて、縦横に、馳け廻つたが、ゲームの聲は、口を突いて、出たと共に、白の方
では、一時に、「どつ」と、喝采が、起り續いて、

「豪いわねえ——末松さん。」

「御目出度う。」

泰山をも、覆さん斗り。

「いゝえ、皆さんが、威勢を、付けて、下すつたからよ。」

と、鼻高々とはしながら、口先は何處迄も、人々を、嬉がらせやうと、務めた。
「さあ——最う、歸りませう、田川さん、今日は早く、御歸りなさいよ、母様

が御心配なさるから。」

「それぢやあ、私はお先へ。」

と、田川は優しく挨拶して立ち去つた。

「皆さん、本當に、御氣の毒ね、今日は、切通の下迄にして頂戴よ、さあ行きませう。」

末松一人を取り圍んで、凡そ、二三十人の妹は後になり、前になり、我こそ、姉の優しい言葉が受けたいと、家路も忘れて、方角違ひに、押しつ、押しれつ、進んで行くのであつた。

(四)

「春枝さんや、お前は、皆んな、良い着物を平生に着ておしまひだけれど、それぢやあ、幾程作へたつて、仕方がないぢやあ有りませんか。」

神経質らしい、婦人は、紫の袴の襷を、伸しながら、斯う云つた。

「だつて、母様……皆さんが、左様なんですもの、私一人汚い姿ぢやあ行かれないぢやあ、有りませんか。」

「お前は、何時でも、左う、お云ひだけれども、此間、父様が、會で、横山さんの御父様に、御目に、御係りなすつて、種々の御話から、學校が、贅澤で、困ると、被仰しやつたら、そんな事はない、我家の娘、なんぞは、少しも姿や風俗には、かまはないと、被仰つたさうだよ。」

春枝は、さもなく、分らない人は、仕方がないと、云ふ風で、

「母様も、随分ですね。横山さんなんか、丸で、相手にする、人は、ありやあ、しませんわ。交際する人も、なかつたら、汚い姿でも、居られませうが、私なんぞは、お手紙は、降るやうに、來るし、土曜、日曜には、何處へ、行かう

の此處へ行かうのつて皆んなが迎ひに來るんですもの……仕方
が有りませせんわそれとも……母様私に人望もなく皆んなと交際
も出来なくなつても良いんですか。」

主客位置を轉じて逆に鋭く遣り返せば母は沈着き拂つて、

「春枝さんやそれぢやあお前の學校では着物や姿で交際するのです
か。如何にも下等ですわねえ。」

春枝は此處ぞと思ふ體で、

「そりやあさうですわ母様貴女にした所で汚い人と其れは其れは天
女のやうな人と何方が良いしう御座います。そりやあ分つて居ませ
う。誰だつて奇麗な人が良いと言ひますわ。だから交際するの
は仕方が有りませせんわ。」

「だつて御前人間は心地が大事ですよ。夫れとも御前の方では着物

さへ美しければ良いのですかえ。」

「母様も分らない人ですわねえ。」

と面へ八の字を深く刻んで、

「まわ母様——一寸今假りに電車へ乗つたと仕ませう。さうすれば
顔に心は書いて有りませんから着物の奇麗な人を身分の良い人と
見ませう。さうすれば席を譲つてなりとも掛けさせて呉れますわ
夫れが反對で汚なければ誰でも厭ですから退いて呉れる所ですか
厭やな顔をして卑すまれますわ……母様——横山さんの事なん
か被仰つたつて丸で理にも非にも成りは仕ないんですもの……
そんな事言つたつて行はれは致ませんわ。」

辯説滔々水の流れる様に淀まず問へず云ひ巻くれば母も呆れて口を
噤み春枝の面を凝然と見成つたのであつた。

(五)

「春枝さん此間の唱歌覺えたかえ。」

二十四五の色は白いが鼻の下の割合に長い口悪が云つたならば先づ
薄鈍とでも渾名を奉るであらう！兎に角人の良ささうな書生はにこ
にこ笑つた。

「幾程私が……覺えが悪いたつて最う諧記してしまひましたわ。」
嫣然ともせず不愛想に言ひ切れば、

「さうかい……そりやあ、豪いねえ。」
と機嫌を執るやうに春枝を窺つた。

「兄さん——さう云へば私……昨日、學校で佛蘭西語が出来ると云
つたの……すると此度の温習會には、マルセーユの曲を歌つて呉
れつて、皆んなに責められますの。兄さん——書いて振假名を付け
て頂戴な。」

首を一寸左に屈げて、甘へるやうに、縋るやうに云つた。

「厭やだよ、春枝さん。此間、僕あ——村上の兄さんに聞いたよ、春枝さ
んは、僕の事を、我家の書生つて、云つてゐるつてね。」

「あら兄さん——だつて、そりやあ、仕方がないわ……學校ぢや、皆ん
なに、調戲はれるんですもの。」

「調戲れたつて、良いぢやあ、ないか……調戲れたら、彼れは、私の好きな、
許嫁のお兄様よ、と、斯う云へば、良いぢやあ、ないか。」

「兄さんは、あんな事ばかり——そんな事云はうもんなら、それこそ……大變だわ。」

「大變だ！何が、大變——盜賊とか、又は、悪い行ひでも、仕たんぢやあ、有るまいし……許嫁の事を我家の書生なんて、云ふ人が、何處に、有るものか。」

「知らないわ……最う良くつてよ。……書かないでも……私——明日つから、學校休むから。」

態と、拗ねて、すつと立ち上がれば、

「春枝さん——怒らんでも、良いよ、書いて遣るから。」

と、本箱の中から、洋野紙を出して、するくくと、造作もなく、書き付けて、

「春枝さん、五番を、一寸忘れたから、明日、佐藤に、聞いて、遣るよ、皆んなに

聞かれたら、五番は、易さしいから、覚えて居ると、お云ひ………良いかえ。」

「はあ、有難う………兄さん、節は？」

「後に、教へて、遣るよ。」

「さう——兄さん、今——教へて、頂戴よ——兄さん——ん。」

と、四ツ五ツの子供が、母親に、菓子強請やうに、鼻を鳴した。

「お嬢様、郵便が、参りました。」

と、下女が出したので、不精不精

「おや、さうかえ。」

と、手に取り上げて、

「何んだ、又、太田と、山本と、大原か。煩さいな………厭になつて終ふ。」

おやこれは誰だらう！遂ぞ聞いた事の無い名だ事……龜山と松原——又妹に成りたいだらう。煩いがこれも交際だ。返事を遣らう。」

表書を読んで、ぐつぐつと獨語しながら、いまぐしさうに額を片手で押して、

「兄さん、後で教へて頂戴。」

と、後に言葉を殘して、疊の足觸りも、あらくしく、男の様に、自分の部屋に這入つて、ばつたりと障子を閉めたが、又開いて、

「梅や、火を持って来て、お呉れ——早く。」

大聲で、さんぐと叫んで、机の前に、打突かるやうに坐つた。

(六)

机の左の方には、文殼が、堆く、右の方には、手帳や、本が、横向き、又は倒などに積まれて、周圍は、反古紙靴下などが、列を亂して、充滿に、取散らされ、流行病は、真先に、飛び込みさうな、有様である。

「まあ、三人とも、揃ひも、揃つて、下手なこと、ふ、ふ、ふ、明後日の遠足に、御誘ひ仕やうたつて。何うせ、私は、車で行くんだわ……仕方がないが、良い加減に、返事をやらう……龜山、松原つて、三年——おや、そんな人が、有るか知らん。何んな、顔だらう！それは、さうと、田川さんに、返事を、遣らなくつちやあならない。」

と、多くの手紙の中から、繪入りの、美しい、封袋なるを、一ツ引き出して、暫く考へて、居たが、

「あ、厭だ、何十通つて、書かなくつちやあならない……今朝も、此間

の、テニスのスタイルが良かったとか、云つて、八通も来たが、弱り切つて終ふ。」

下女が運んで来た火鉢を、無造作に掻き立て、

「お、寒い。」

と、肩を窄め、腮を火に翳して、萎縮けたやうに、封筒を引つ返しては、又引つ返しながら、

「田川さんが、一番上手だな……どれ、私は、妹が、幾人出来たか、數へて見やう……關さんにも、負けはしまし。一、二、三、四。」

「おほ、>>>>、>>>>、>>>>、丁度四十九人——最う一人で五十人だ。此間關さんが三十七人だと、自慢して居たが、私の方が、今度は多いわ。」

得意氣に、右手の本箱の上から、懐中鏡を執つて、凝然と見詰めて、嫣然。

「此んな事は仕て居られない。今日は、田川さんの家へ行く約束だった。屹度、末松さんは、何うしたんだらうと、待つて居るだらう！」

思ひ付いたやうに、大急で、仕度を整へ、ラケットを抱へて、立關へばたばたと、行つたのであつた。

(七)

「太田さんも、大原さんも、良い加減になさいよ、皆んなに笑はれるわ。」

「だつても私——口惜しいんですもの。」

「本當に、口惜しいわ。」

と、三人は、聲を揃へて、恨めば、

「どう成すつたの、大原さん。」

「太田さん何うしたの。」

と、皆々、不思議と、寄り集つて、色々と言葉を盡した。

「一寸、是品御覧なさい。先程大石さんが、お鳥居の所で、此の手紙を拾つて、私に見せて、下さつたのよ。本當に私——腹が立つわ。」

「どれ、拜見。」

と、口々に云ひながら、引つ張り合つて、読み下せば、

「田川さん、此間のお手紙、拜見してよ……決して、そんな事ないわ、あのね、私、太田さんや、大原さんの、連中は、大嫌ひ、げぢく、のやうに、思つて居るわ……」

私ね、貴妹より外に、思つて居る人はないの……跡の人達は、ね、失望するだらうと思つて、妹にして、遣つたのよ。どれもく大嫌ひ……

心地を悪くしちやあいやよ。左様なら。

懐しき

田川様

春枝姉より

「まわ——」

と、顔見合せて、

「本當に、口惜しい。」

今迄笑つて居た生徒は、頬を膨して、涙をぼろくと流した。平生末松を喜ばぬ生徒は、嬉し氣に、此方を見て、

「どうせ、末松さんなんか、碌な、人ぢやあないわ。私始めつから、さう思つたの。」

(八)

「私にも、そんな風に書いてあつたわ。」

「口惜しい——皆んな虚言だつた。」

「口惜しい……餘り人を……。」

と、兵兒帯の間に、大事に入つてあつた、二三通の、玉章を、

「口惜しい。」

「口惜しい。」

と、云ふと共に、びり／＼と引き裂いた。

其様は、唯油紙に、火が點いたやうな騒ぎであつた。

(九)

「斯う被仰るんですもの私——情なく成つたわ。」

「良いぢやあ有りませんか、皆さんが怒つたつて。」

「でも私餘り皆さんに、云はれると悲しくなつて……学校へ行くのも、厭になつて、終ひますわ。」

「先程の事は、私が皆んなに、手紙の一本づつも、やれば、大丈夫よ。若し、又……二十人や、三十人の、人望が、無くなつたつても……貴嬢さ

へ、怒らないで、下さりやわ。」

「本當？」

と、云つた限り、田川は、嬉しさに、涙を流して、末松の手を取つた。末松は、心中で、舌を出した。かうして、既に、一人は、心から、生捕にした。是れからは、又、二年級、三年級の、人望を、元に、復させなければならぬ。然し、譯もない事だらうと、考へると、何となく、愉快に、感じられる。どうしても、自分は、公使夫人に、適當なもの。

見下せば細い、小さな川が、ちよろくと田の畔の傍を、清く流れて、蒼々とした松山には風が琴の音のやうに通つて居る。其の風景の美しさ、流石、大宮であると、二人は、恍然として眺めて居ると、後の方で、ピーと呼子の笛が聞えた。

* * * * *

初日影は長閑に、門の松竹を照して、日の御旗は、愈々、明らかく、治る御世を、祝ひ顔な、正月とはなつた。白の長い肩掛を、吹く風に、靡かせて、活潑に靴先で、小砂利を蹴立て、歩く、ハイカラ式部の後に、相も變らず、何十人といふ、御供が、従つたであらうか！

軋 轢

(上)

「本當——貴嬢彼の先生が、そんなに、好なの。」

「そりやあ、云はずともだわ。」

「ぢやあ——今日の揭示を讀んで、貴嬢は何んと思つて？」

梅干の核でも、含んで居るやうな、口付きで、深い意味があると云ふ風に、對手の面を眺めた。

「私——別に、唯残念と、感じてよ。」

「夫れですもの。」

平然と構へて居る友を、自烈たさうに、

「それだから私——口惜しいわ。知つて居る人は少いんですもの。」

「え、渡邊さん何んか譯が有るの？ 話して頂戴ね、お願いだから。」

今度は急ぎ込んで頼むやうに問ふと、反對に、落着いて、

「だつてもしも、そんな事云つて、貴嬢に心變りでも、されると、それこそ、

大變に、成るから、まあ、止ませう。」と、勿體振つて、態と焦せば、

「良いぢやあ、有りませんか、そんなに、思はせ振なんか、仕ないだつて、

是でも、私だつて、我黨の士だわ。」

「ふ、ふ、ふ、甘い事ばかり云つて居るのね。我黨の士だなんて、そんな、漢語は、使はないでも、良いわ。」

「ふ、ふ、ふ、渡邊さん、其事情は、大抵察してよ。」

「何うして。」

「そりやあ、私だつて、大抵分るわ。今度の吉田先生と、北原さんと、同時に止めた、一件なんぞせう？」

「まあ、さうだわ。それには、違ひないけれども、其處に、腹の立つ、非常な、

事情が、有るんだわ。當て、御覽なさい——佐々木さん。」

暫く、小首を傾げて、思案に、暮れた、様子であつたが、

「分つた。」と、高く、叫んで、調子を、合はせるやうに、廊下の窓を、とんと叩

した。

「お、驚いた……分つて？ それぢやあ、何んなの。」

「云ひませうか、彼のそら、田螺との、軋轢でせう。」

「田螺——田螺つて、一體、誰の事？」

「ほ、ふ、ふ、お尻が、曲つて、居る人の、事よ。」

「大塚先生？」

「ほ、ほ、ほ。」と大聲で笑つて、

「え、——。」と頷きながら重々しく答へた。

「全く田螺よ、ありやあ。」

「さうでせう？事情つて、田螺の事でせう。」

「さうなのよ………だけど、未だ、未だ、深い譯が有るのよ。」

「話して頂戴な。早く——時間が打つから………ねえ渡邊さん。」も

ぞくぞくして、小使部屋の方を眺めて、

「御願だわ。ね、渡邊さん。」

(下)

「北原さんは、豪い………貴嬢のやうな方でなくつちやあ、兎ても、紀念

會に………大勢人の居る前で、外國人になつて濟しちやあ、居られな
い、などと、さもく、北原さんが、御轉婆だといふやうに、地理の時間に、
くどくどと云つたんですと。」

「まあ、そんな事、云つたの、良いぢやあ、有りませんか、西洋婦人に、成らう
と、何んに、成らうと、餘興ですもの。随分解らない田螺ねえ。」

「だもんだから、吉田先生が、お怒りなすつてね、擔任の生徒の、御世話な
んか、焼いて、下さらないでも、良い。と、被仰つたんですと。」

「實に、豪いわね、流石は、吉田先生だわ。」
と、愉快さうに、力を入れて、云ひ切つた。

「實際だわ。それでね、先生達が、二派に分れたんですと、けれども、大塚
先生の例の、田螺はね、家が、金満家で、其上、吉田先生に、人望が有ると云

つて、平生嫉んで居る先生達は、實に卑しいのねえ。皆んなあの厭やな田螺に、屬いて、たつた山川先生一人吉田先生の方へ、肩を持つたんですと……呆れて、物が言へないはねえ、そんな連中が、中等の教育を授けるんですもの、到底——駄目だわ。」

「本當ね。」

と、嘆息して、

「それから。」

「それで、吉田先生も、彼の通り、豪い方だから、辭職の届を成すつたのよ……すると、許可に、成つたの……だもんだから、北原さんも、怒つて、退學なすたんですわ。」

「まわ、厭やな、奴ね、田螺は。」

「私——此學校に、愛想が盡き果てたわ。」

「全くよ。」と、憤慨したやうに、眉を擡めた。

「それに、未だ、有るのよ……先程の、三時間目にね、田螺が、地理を、教へに、來て、斯う云ふのよ。「皆さん、お氣の毒ですが、吉田先生は、肺病に、成りました、此の病は、嫌な、病氣で、若し、假りに、患者が、教室で、何か、申しますれば、皆さんの呼吸する、空氣の中に、パチルスが、交つて、それを、呼吸した、人々に、傳染します。斯う云ふ、風な、恐しい、病ですから、まして、傍で、話なんか、成すつたらば、受合つて、肺病になります。」と、斯んな、憎らし、事を、云ふのよ。」

「まわだ——。」

「だから、餘り、吉田先生の、家へ、御見舞に、行つては、不可ません。」と、斯う、

云ふのよ。」

「馬鹿にして居るわねえ……行かうと行くまいと此方の勝手ぢや
ありませんか。」

「それに吉田先生は肺病ぢやあないのよ……餘りね。」
と言葉を断つて、

「さうしてね皆さんの人望を自身に集めやうと思つて……田螺は
いろくいな事を云ふのよだもんだから去るものは日々に疎して吉
田先生を忘れる人が……彼の情深い先生を忘れる人が多くなつ
て此頃ぢやあ大塚黨ばかり蔓延るのよ。」

「残念ねえ。」

「全くよ——それで田螺は吉田黨だと知ると學術が出来ても愚圖愚

圖云つて人の顔を見て手を上げたとかやれ笑つたとか始終云つて
居るのよ。本當に彼の田螺は嫌な奴ね。」

「田螺斗りぢやあなく皆んなさうよ……心が卑劣でね下らない事
を愚圖愚圖云ふのよ……何んでも着物が美しくつて家さえ金持
なら學術は出来ず人間は野卑でもへいへいするのよ随分下等な學
校ね。」

「此んな學校へ入學したのは私の誤りよ父兄は良いと思つて續々學
校へ入れるから可笑しいのね……私なんぞは最う子々孫々此ん
な學校なんかには入れないわ。」

「全くよ。」

「ほ……」

丁度其時ぢやんくくと鐘が鳴つたので二人は慌敷く一禮して馳せ去つた。

三

天王祭

神輿洗ふ 肘笠雨に

たそがるゝ 天王祭。

紅 にじむ 花傘の下、

町の娘の 雨切れを待つ。

花ひととき

(二)

しとくと油のやうに更けたる春雨は名残を若葉に留めて、一面灰色なる空の間に、青雲の龜裂深う、自然の手に成れる油繪を水溜に寫して、こぼれ松葉の額縁さびたり。

信一の洗湯へと出で行きたる後、お蓉は机の前に坐して、細き華奢なる左の手を頬に當て、膝の上の右手は手巾を弄り疲れてか、身動きだにせで、何やら想に沈み居たるが、烏の行水にも似たる信一の、早くも格子戸を開くる音のするに、出迎へんと立ち上れば、男の手荒く障子開けて、石鹼箱濡手拭様可笑しう、兩手に提げて入口に立ちたるまゝ、ほんのりと

花ひととき

三

上氣したる面の莞爾やかに此方を見るに、お蓉は面恥ゆくすと立ち、
窓の簾を捲き始むれば、今朝結ひたての丸鬘品良く、赤き手柄の得も言
はれず艶なるに、流石氣の着かぬ性の信一の眼にも入りてや、

「いよ——奥さんはッは、>>丸鬘と御出なすッたね……。變つ
たものさ。」

と子供待遇に戯れながら本箱の上に湯道具を乗せて、部屋の中まなに疲
勞したるやうに坐り、大和を机の上より取りて一本引き抜き、口に脚へ
てマツチを擦れば、お蓉はさと頬を染て無言の儘尙は簾を捲き上ぐる
に紛らす邪氣なさ。

「本當に今日は美しくつて後光が射すやうだよ。」
と打笑ひながら相手にならぬお蓉を物足りな氣に窺へば、お蓉は右に

て簾を支へて此方を振り向き、憎らしいえ、お止しなされと云はぬば
かりに、優しき目の光にて態と男を睨めば、

「始まつたな……真奴流の眼付が、はッは、>>>丸鬘の奥さんは
少し柔順しくするものだよ。」

と面白さうに揶揄はれて、

「知りませぬわ……何んとても被仰いまし。」

と一寸身を拗ねたる途端に、手は弛みて折角捲きたる簾はするくくと
解けて、碧練の瀑布の九天より沸り落つるやう。

お蓉は解くる力の烈しさに驚きて支ふる事をも忘れ果て可愛き眼を
細めて一足退けば、薄う窓を射たる日の光は簾に遮られて、部屋の内は
暫し薄暗うなりぬ。

「どうしたんだい、お蓉ちゃん……寐惚けちやあ不可ないよ。」

「あらッ、貴郎ッてば……本當にお人が悪いのねえ。」

突然男の後に廻りて、紺飛白の羽織の肩を軽く叩かんとすれば、それと悟りてや信一の早くも身を前に引くに、お蓉が手は唯真似にのみ止りて笑はるゝ種を増したるばかり。

「はッは、>>>、何處かの人のお仕込で口が悪くなつた、僕を叩たつて捫つたつて驕りやあしないよ。」

と巻烟草を口より出し、堪へ難さうに笑へば、お蓉は態と勃然としたる氣色して、

「何處かの人ッ……分つてよ……知つてるわ。」
と口の内に詰らなささうに云ふに、

「あッはッは、>>>知つとれば結構……何處かの人の……云

はうか……はッは、>>>年は十九の花盛り……浮氣で……」
一入可笑し氣にお蓉を見遣りて、

「男泣かせて……」
又じろりと流し目に見ながら、

「顔は可愛い……蟲も殺さぬお嬢様おつと、奥様と申上げるんだつた。誰に見せるんだか知らないが、これ見よがしの丸鬚なんぞに結ひ込んで……」

尙ほ云はんとするをお蓉は遮りて、

「よくつてよ……知らないわ。」
と自裂たるやうに口を固く締むれば、雙頬の鬚は愛らしう。

「誰もお蓉ちゃんのことを云てやしないぢやあなうか。」
「知りませんよ……澤山被仰い。」
とくるり後向き、その撫肩のすらりと優しさを凝然と見ながら、
「はッは、ハ、ハ、ハ、さう怒らないでも良ぢやないか。」

(二)

半分迄捲きたる青簾を以前は女時計の紐にやと思はるゝ紫のリボンにて結び留むれば次第に面を照したる太陽は雨の名残の立木の露を輝かせて、風なきに散る真珠の玉ははらりと碎けてお蓉が袂に亂れ懸りぬ。
春は更けたれども若やぎて、陽氣に浮き立つやう覺ゆれば、信一は一入元氣よく、

「お蓉ちゃん、お天氣になつたら其處等へ行つて見やうか……。日曜で随分人が出るだらうよ。」

「はあ。」

とは云へどお蓉は進まぬ様子にて、

「だつて私……今日は厭や。」

「何故？ 僕のやうな三文士偶と一緒に行くのは厭やだと云ふのかえ。」

「あら又貴郎……さうぢやないんですけれど……。」
と云ひ遊れば、

「さうなんだらう、さうならさうとお云ひなよ……無理にとは云はないから。」

「貴郎ッてば……私やあ貴郎に此身を裂いても上げたいと思つて

居るのに……そんな事はかり……。」
艶々とせし顔に何時とはなく愁ひの雲の懸りたるを信一は見て見ぬ
振り、

「何うだか！」

と強う云ひて相手にせぬに、

「貴郎。」

と力を入れて、思ひ込みたる風情なれど、

「なんだえ。」

と尙ほ慳貪なる調子の厭々らしきにお蓉は、と胸を突き立て、

「貴郎……」

若しも私が……今日限りお別れするやうな事があつ
たら……矢張り左様思つて居らつしやるの。」

其の容子と云ひ問と云ひ怪しとは思ひしもの、信一は別に氣にも留
めて、

「なにがさはッは、今日限りだなんて……お宮さん……
そろそろ貫一が鼻について来たので、土俵際で背負ひ投げを喰はさ
うと云ふ料見だね……御心配には及ばないさ……厭やだと云
ふんなら、何時でも別れて遣るよ——。」

物をも云はで、唯手巾を噛み締めたる儘、吐息を漏せしお蓉の様の痛く
も哀れなるに、信一は思はず知らず、

「お蓉ちゃん。」

と進み寄りて其の手を取り傷し氣に、俯伏きたるお蓉を見成れば、首を
上げて淋しく笑ふに嬉しく、持ちたる手に力を込めてそつと一締め、

「貴郎。」

とお蓉も握り返して媚びある眼の訴ふるやうに、將た求むるやうに、濕味を帯びて、男の顔を仰ぎ見たるが、其の膝に寄り掛りて、少し甘へたる調子の愛らしう、

「私の今日の髪……貴郎何んと思つて？」

「今日の髪？ 僕にや上手下手は解らないが、至極良いと思ふね……赤い手柄は大好きなもの……例の妬き君が來たら、さぞ怒るだらうよ、ねえお蓉ちゃん、此から何時でもさうお結ひよ……はッはッ、は女振りが十段も上つて見えるから……此方は少し御心配筋さ。」と又そろ／＼お容を翳り始むれども、お蓉が耳には、「此れからは何時でもさうお結ひよ。」との言葉のみ痛くも響きて情なう。

おはれ考ふれば此も涙の種、今日を名残の黒髪の毛の何とて又結はるべき、張り裂けもすべき我が胸を、知らぬ信一様の優しき數々を却りて恨みなる。

「もしも……此の髪が、今日一晩に無くなつて終ひましたら……。」と、それとなく云ひ斷りて、ほろりと一雫何事をも知らぬ信一、おはれ後にて思ひ當らんを。

「はッ、ッ、馬鹿な、そんな事が有るものか。」

「貴郎——何だか私やあ、これが……お名残のやうな氣がして……。」櫻の枝に尾花が咲いて、桔梗の花が莖に化ける世になるとも、變らじものをと契りしを。

戀しと云ふも今を終り床しと云ふも今日を限り、あはれ盡きぬ名残を
何とかすべきと、抑ゆる胸の苦しみの熱き涙となりてはらくと散れ
ば、信一は女心の色々と案じてならんと、

「お蓉ちやん、何うかしたのかえ……。何でも心配はしない方が良
いよ、身體に障るからね……とは云ふもの、男の僕でさへお蓉ち
やんがそんな髪になんぞ結ふと、何時迄も日蔭の身で居たくない
と思ふからね……況して女の身ぢやあ、何かにつけて情ないだらう
よ……。親父が許して呉れて……可愛い子供でも出来りやあ
ね……。紛擾はないんだが、はッはッ、又儘にならない處が、面
白いんだらうよ……。苦しみの中に少し計り楽しい事が有るから、
一層嬉しくも感じるのさ……。ねえお蓉ちやん、さうぢやないか、お

前まわくよくしないでお茶でもお入れよ。」

と、慰むる言葉の今日は、一入身に染々と刻まれて——思ひ断られと
……。絶念られと……。假令我が身は、世の笑はれ者となるとも……。
義理知らず、情知らず……。人らしからぬ畜生となり果つるとも。
否！否！今更ら思ふまじ、思ふまじ……。未練なる淺ましき事を——
疾くより極めたる覺悟いかでか翻さるべき。されど信一様に別れて
……。あはれ怨恨の世や。

(三)

今宵しも三月の八日。
朧なるが常の春雨上りの十六夜の月は、あはれお蓉が苦しき胸をも悟
らで、忘れ果てにし古を、尙ほ一入に偲べとや、秩序正き信一が机の邊よ

り部屋の半分は天然の墨繪を描く。

因縁有り氣に釣りたる軒端の燦鏡一點の曇りもあらで彼れか此れかと何れを眞實と分さかねる婦娥の姿。

心の惱みに色こそは蒼けれ。嬋妍なる面の何處とはなく生々と張を持ちて、豊かなる頬の羽二重にも似たる半面より小造りの愛らしき立姿に月光を浴びて、十九とは云へど派手好みの、オリブ色のメリンス友禪の羽織は、一入若く見せて憎や手折りし風雅男の信一。

「あゝ——情ない……………」

待ちに待ちたる櫻花の、やう／＼に開きたるを、七つ下りの雨は竭みさうにもせずしと／＼と降るに、入相の鐘の惜みてや、ごーんと力なく長く響きて、夕暮を一入悲しますにも似たるお春の聲は、人無近邊に染み

入るやう、瑠璃の鏡も曇りやしたる？玉兔の姿は暫し隠れて、

「私位……………運の悪い者が……………」

艶めかしき中に、限りなき憂愁を帯びて、末は噉り泣きとなりしが、堪へんとして二度三度唾を飲み込みて、

「今更ら慨くまい……………もう／＼思ひ断つた……………。慨くまい……………」

。慨かない……………」

と身を悶躁きて、止めんとすれば、尙一入に沸き出づるは儘ならぬ涙にて、心弱き身のわつと斗りに唇を漏るゝ甲斐なさを齒に噛み締むれば、却りて迫り来る胸の切なさ、

「こゝ、こんな心の弱い事で……………是れから……………幾十年の間……………どうして……………どうして送られやう……………泣かない……………もう泣

くまい……………」

蜂谷の烈しき痛みを指先に押へて、今しも自ら釣りたる秘蔵の鏡を見上げしが。

あはれ、此の鏡……………去年の暮れ頃より散歩の次手、仲町の某の店に這入る毎に、さても良き鏡欲しきものと申せしを、信一様の聞きて始めは笑はれしが、度々云ふに買うてやらんとて、書生の身には大枚五圓と云ふ金、獨逸語の何とやら云ふ本を節して、買うて下されし此鏡世に鳴りての後の五千圓にも増したる賜物、生命より二番目と愛せしを……………左の隅に尾花の亂れの模様の有るを痛くも我が氣に入りたるは、あはれ、斯くなり果てよとの前よりの知らせなりしか？水紅色の房をと好みしを、信一様の、褪め易ければ赤にせよ、それとも金色夜叉のお宮のや

うに、褪る氣ならば詮もなしと、憎まれ口叩かるゝに、腹立たしく、そのやうな詰らぬ事男らしくもない、お止しなされと、睨み付くれば、お——恐い、姫御前のあられもない、睨める目付が僕を殺すのだと、擲擲れて愈々拗れば、晴れて夫婦に成る迄は、赤にしておきと、優しき言の葉、初花染の色深く、想ひし心は、此の紅と共に變らねど、變らでは叶はぬ、憂身恨み辛みも世にあればこそ、あはれ死して墓に葬られたき願なるを！

(四)

「あ、貴郎……………勘忍して頂戴……………今迄御心配ばかり懸けて……………」

林間酒を暖めてと風流を極め込む、紅葉も色褪せて枯葉堆く、盛り長き菊は萎みて木枯叫ぶ冬となり、白妙の雪はそよ〜と吹く春風に解け

花ひととき

て、梅花先づ綻び初め、鶯老いて御國の花は旗雲の流れと見えしが、それも一夜の嵐に散り失せて若葉に渡る青嵐に不如歸待つ昨日今日迄指折れば十月餘り、つひうかくと日の昇りたるに朝を知り、時に歸る群鳥に夕を悟りて暮せしが、さても月日は早きもの忘れもせぬ八月の十日、寫眞撮らうと信一様の仰せらるゝに、あらがねの土をも焼く晝の暑さも厭はで、上野に大時計が三時を指せし頃電車に乗りて萬世橋の傍なる江木に入りたるに、信一様は彼れや此れやと可笑しき事ばかり二度三度噴き出して、寫眞師を困らせしが、出来上れば二人とも笑うて居るに、鈿女と凸凹男が甘酒に酔つて居るやうだなどと、友達に示す毎に信一様は大笑ひ、我が身も愛嬌寫眞と名を付けて笑の種となせしが、これぞ二人が紀念の寫眞——あはれ二人が深き深き戀の形見なりしか

と、抱き締めて、

「本當に先程……友達の所へ行つて来るから、鼠に引かれないうらにお留守居してお出よつて、被仰つたのが……お——お名残りねえ。」

「貴郎——貴郎づてば……何故お蓉と云つては下さらないの……え——貴郎……。」

と、絶え入りやすべきと怪しまるゝばかり咽びながら、雪の額を信一の寫眞に當て、

「何故……なんだい、噓しいと云つて下さらないの、え——貴郎づてば……私やあ……最う……。」

と聲を途断らして、

「最う……お目には懸れないのよ……貴郎——私やあもう死んで終ふのよ……。そーそれよりも愁い、わー尼に……。」
と啜り上げて、

「泣いて下さらないの……えー、貴郎。」

「御一所に死なうつてお約束したのねえ……わ——ッ……。」
と寫眞を固く抱きたる儘身を投げ出せば、眞白き腕は露出れて、大理石かと怪しまるゝ程透明りたる首筋の後れ毛さへもなく、震ひ付き度きばかりの濃く形良き領足信一ならぬも迷ふなるべし。
姿の亂れたるをも歎きに忘れてや、起き上りて軒を眺めしが、思ひ出づれば江木の歸るさ、五十稻荷の縁日にて岐阜提灯と松蟲とを求めたりしが、團扇にて我身に煽がれながら信一様の打ちたる釘、今を名残なる

鏡掛くるとは思はざりしを。

來年の今頃は勘當が許されて、松蟲の音を聞かうと仰せられしが、それも夢なりし。

「わーわ、私が……尼になつたら信一さんが……何んなに……」
お歎きなさるだらう。」

と、絞り出せしやうなる調子に云ひては斜に空を仰ぎ見たる眼の涼しさ、黒々としたる睫毛の長さ、愛嬌ある中に力味を持ちて意味有り氣なる、これや傾國の相なるべし。

女心の淺ましく考ふるにてはなけれど、信一様の父上も餘り酷きぞかし、我身のやうなる不束者お氣に入らぬは道理なれども、我も同じく生を人に受けて、月には泣き、花には笑ふ身なるものを。

新宅のお梅様とやら、財産も有るべし、藝も出来るべし、鉦女に愛嬌拔きたるやうな山出し、厭やな事と信一様は身振ひし給へど、父上母上のお氣に叶ひたるお方、よもやさる事はあるまじ。されど想ふ人にこそ姿も作れ、心に染まぬ人の、如何に優しうしたりとて何とて嬉しかるべき。浮世の波に任する一葉舟の、浮くも沈むも共に力を盡して漕ぎ行くべき夫婦の、始めより厭やと思ひてはいかで永き年月同じう住はるべき。お梅様とやら、我が格氣にてはなけれど、信一様のお氣に入らぬは今更ら云はでも知るゝに、斯かる縁の糸の、よし父上の威光にて、一時は強て繁ぐとも、無理に咲かせし室咲の花は、勢なく萎縮けて、早く萎るゝ習ひなるを。

父上の怒りに觸れて、學費の道も絶えにしより、早や十一ヶ月、梅笑ふ頃は、櫻咲く頃は、もしやもしやも空頼みにて、望みも無くなりし今……振り分け髪の幼き頃より、幸薄く、父も亡く、兄弟さへも無き、我身、桐の葉と疾く散らば、信一様も思ひ絶念めて下さるべしとは、決心せしも一度や二度にてはあらざりき。されど何時も信一様に悟られて、短氣を起して呉れるな、お蓉ちやんにもしものことがあるならば、僕も男だ、決して一人見殺しにはせぬ、と情深き言葉に……あはれ思へば、未練なりし。

(五)

忌はしく賤しき物にて、貴きは黄金の光なるぞかし。神の姿を人に換へて、假りに此世に顯れたる詩人等すらも、此の爲には屢々泣かざるゝ

とかや。
 人に越えたる信一様の今の苦勞もあらで勉強し給は、容易く博士にもなるべき身なるを！故郷にては第一の富豪の一粒種、それが聞くも恐ろしき高利貸とやらの金に學ばるゝ！これも誰の爲かや。
 卒業こそは無事にすべけれ、其後の運動費、それは入らじとするも、一年志願の時の入費加へては洋行せんと仰せらるゝ、望何時遂げらるべき兼ねては疎みたる金の、今日始めて欲しきぞかし。されど斯かる事を百千度心に練り返したりとて、目の前に黄金の山の築かるべきにもあらねば、詮もなし。
 つくづく考ふるに、如何に離れ難なき鴛鴦の契の二人が仲なりとて、戀を生命の女はそれにて道も立て、戀に朽ち果つべき身にはあらぬ男の、

搦まる藤葛の爲に思ふやうには延びられて、一生を空しく、廣き舞臺に飛躍もなさで、名もなく功もあらで終りなば、いかばかり云ひ甲斐なきことならんを！元より信一様に捧げし命、御心に逆らはぬばかりが能かは。

忍び難きを忍び、袂を拂ひて我と悲しき境遇に漂泊ふも、女の意地……離れ難き胸の想ひを、片頬の笑に紛らして、我から去るも浮世の義理ぞかし。

我を慈しみ下されたる伯母様は在りたれども、過ぎし二月亡失りて寄る邊もなき拾小舟の此身、廣き世界に力と頼むは、我が身を心をも捧げたき信一様一人。

これが思ひ断れとて、そも思ひ断らるべきか！抜き捨てし忘草、今は仲

花ひととき

仲に恨なるぞかし。男の爲め健康なれと祈りたる此身。あはれ重き病の床にも臥したし。一生の思ひ出には、信一様の目の前にて心の遣く程泣いて泣いて泣き抜いて死んで終ひ度し。さすれば末期の水も、信一様の御手より……

……叶ふべしとは思はねど、何と云ふ神の何れの方に有るやも知らず、唯雙手を合せたる上にはらくと懸る眞珠の玉。

お春は膝の上なる手巾を取り上げて、涙を拭きしが、一隅を齒にて喰ひ締め、斜なる一隅を右手に搦みて力無氣に引きたる儘、立木の影の描けるが如き壘を見詰むれば、信一の寫眞は愈よ照り増る月光に、其の人の嫣然と笑ふに、左を延して奪ふやうに忙しく取り上げて、懐かし氣に見詰めぬ。

「あゝ、死んで終ひたい……」

募り募りし憂思ひの凝りて發したる聲は、谷川の水の寒さに咽ぶにも似て、眞底より沸き出したるやう。手巾は何時しか右手にのみ残りて、着物の前の亂れたれば、緋の長縹袴の少し顯れたるに配して、紅白の色彩り、艶麗しさぞ一入なる。

「貴郎——とも……もう云へないのねえ……。明日ッからは……あかの……他——他人よッ……」

千代とも契りし夫と妻とが、明日よりはあはれ片羽の離れ蝶、あかの他人の一言は、お春が身をずた／＼に断り裂かるゝよりも、悲しき叫びなるべし。

「貴郎ッ……もう何んにも云ひませぬ……御出世なすつて頂

戴よ……。そ——それから……お梅さんと仲良く……早く……
可愛い……坊ちやんでも……。」

ふるくくと身を震はせて、

「本當にお別れねえ……。これがもう……一生のお別れね……」

貴郎ッ——……一生のお別れよッ……あゝ情ない……。」

今を名残の最愛なる人に物をも云はぬ信一の寫眞は二度三度色褪せたるお蓉が唇に接吻されしが、

「お名残りねえ……。」

恨みか！悲しみか！愁か！あはれ計り知られぬ絶叫と共に、お蓉の花の姿はどうと倒れて投げ出されし信一の顔、何をか喜べる？ 嫣然として、何の浮世か。

(六)

断らんかな此の丸鬚……あはれ絶たんなかな縁の糸。

離れ小島の數多きを淀みもあらで流るゝ長江にも似たる青雲の中に、悠々として澄む月は、お蓉が此の年月心に懸けし、鼻上の微やかなる黒子さへも定かに映し出しぬ、明鏡の中に。

随分世間には標致美しもあるが、此の子のやうに頭の先から足の先迄、奇麗なものも少なからう、唯母親譲りの鼻の上の黒子が玉に疵とは云ふものの、それとて鼻上の黒子は人に可愛がられるとか、却つて仕合になる事も有らう。と古風な伯母様の洗湯のお供を爲る毎に仰られしが、丁度十五歳の暮れ、相見道樂の松葉屋の御隠居、恥かしがる我をどれどれと眼鏡を懸けてつくく見られ何處も申分はなけれど、額の富士額

なのが薄命の相、それに鼻の上の黒子、小さいが場所が悪い、此の娘さん
男に思はれて、ことによると一生を捨てねば良いが、と飾りもなう云
はるゝに、厭やな御隠居、何て人相等が當にならうぞ、とは思ひしものゝ
其後は、氣に懸りて鏡見る度にえ、憎や黒子奴が。
意地悪や、今宵の月、分きて輝くやう覺ゆるは、我歎きをば増せとにや！
見たくもあらぬ黒髪の美しうも映る鏡の中、此の次も又其次も又其次
も丸鬚にと仰られしが、耳の底に残りて去りやらぬを！
始めを終りの果敢なき丸鬚、一生の形見と信一樣は思し召さぬかや。
厭やと云ふ我が身を、無理に島田鬚結はせて、華美好きの伯母様が紫矢
飛白の單衣に緋緞子の帯締めさせて、睡眼を擦る妾を子供らしいと
笑はれながら、不忍池の蓮見に連れて行きて下されしが、辨天様の後に

獨り坦然と柳の幹に身を凭せて、蓮の開く音に耳を澄せし信一樣、伯母
様の一人子の武坊、何時どこで見覺えたやら、彼の方知つてるとばかり
驅け寄りて、兄さんと呼ぶに信一樣も驚きて、やあ武ちゃん一人で？と
尋ねれば、いゝえ母さんと姉さんと此方を指さされて、さと面を染め伯
母様の後に隠れしが、伯母様はそれと知りてか、毎度武が上りましてと
挨拶して、少と私共へもと眞心より出でたる言葉、疾くにも呼びたかり
し武坊は母の許しのありたれば飛び付きて、兄さん今日被入しやいと、
桃の實のつひに熟さで逝きたる程ありて、人懐こき利發なる子の手を
握みて離さねば詮方なく明日を約して別れしが、それよりは我が家の
如く陸びて、一日信一樣の影見えねば夕餉の終りたる後、伯母様と武坊
と妾と少き家族の淋しさを覺えて、縁側に座蒲團敷きて物語りしなが

ら先づ伯母様の武坊信一様は未だ學校かねえと口を斷るに、どうだか
姉さん行つて見やうと、門口に出迎へるが常月の宴花の席何時も信一
様が附物なるに、恐しと思ひたる男の却りて淡泊と厭味なきを知るに
つれて懐しくなり、進みては戀となり、果ては可愛さの身に染々と覺え
て、二日でも三日でも傍を離れたくなきを粹なる伯母様の知りて信一
様と一處に住ふやうして下されしが、孫にても出來なばお國の父上も
許して下さるべし、それ迄は能く信一様に飽かれぬやうにと、身を終る
迄の御教へ、伯母様の草葉の蔭にて我が身の苦しみを知らし召すかや。
『あゝ、死ぬ方がどんなに好いだらう……これから後の切なさを思
ふと……思ひ斷ない……あゝ、どうしても……思ひ斷ない。』
と、よろ／＼となりしが、

三

『え、未練らしい……夫の爲めに捨てる身だもの……なんで惜
しからう……』

未練なりと上げたる、右手に持ちたる手巾の中。あはれ、月に映じたる
剃刀の白う。

月は愈々澄み渡り、明鏡の中愈々冴えて、冷かに氷のやう、緑の黒髪愈々
黒々と玉の如き美人の容顔愈々蒼く捨て難し。

わつと倒れ伏すと共に剃刀は力無く飛び、何時の程よりか整へ置き
たる？ 見るも肌寒き黒染の衣の袖に時ならぬ秋の霜白し。

再び手に取り上げて立ち上れば、少しの亂れさへもなかりし鬢の絆毛
二筋三筋類に懸りて、引結びたる唇より流出る紅。

振り仰ぎたる面には、涙の痕もあらで、引釣りたる芙蓉の吡、明星と輝く

花ひととき

三

眼光澤美しき鬘の半に玉手は掛りて、穩かなる夜の静けき風情を破る
剃刀の電光一線頭上に閃めけば、酷くや洗ひつ梳いつ愛でたりし黒漆
の髻は惜氣もなう。
明鏡は霧に蔽はれて、悽婉なる美人の姿は玉兔と共にあはれ、搔き消す
やう。
哀しみやしたる？ 大空の長江の流れは白波動搖ぎて、月は暫し朧にな
りぬ。

かへりざき

(一)

「まあ、お珍らしい。」
と云ふお糸の聲が餘り驚いたやうなので、明子は誰やら久しぶりの客
來を知り、一心に成つて居た編物の手を止めて、見本も糸も編掛も一所
に、忙しく根來塗の小箱の中へ根束其儘に押込んで、立ち上りながら、だ
らしなくなつた端折をさちんと整へた。
何やら二言三言お糸と言葉を交へて居た客はつか／＼と明子の部屋
の前へ来て、暫く躊躇ふ様子であつたが、意を決したらしくスラリ襖を
開け放すと、室内には出迎へやうとした明子の淋しい笑顔が美しう情

かへりざき

一三

然と立つて居た。明子は客の面を仰ぐや否や、

「あら渡さん。」

と心から懐しさうな聲が口を突いて出た。其色蒼然めた豊かな羽二重のやうな頬に窈の著しい、自棄に結んだやうな引つ詰の花月巻が年よりも大層老けて見せるのを男は凝然と見成つて居たが黙然つて唯首垂れて終つた。

明子も無言の儘で柔優に座に返り、自分の敷いて居た紫のカシミヤの柵を裏返しにして男に勧めながら、火鉢の火を思ひ有氣に掻き立て、灰を平しながら自分の勧めに黙した儘で機械的に従ふ相手の有様をつくつく見詰めて居たが、何時かはろりと熱い一筆は、形の細つそりとした品の良い膝を濕したのである。

「貴郎、まあ何うして今日なんぞ被入しやいましたの？」

と明子は男の顔色の何んとなく不安心らしいのに、情の籠つた嬌やかな眼を斜に注ぐと、

「どうしてつて……。」

と渡は明子の言葉を繰り返し、

「来たから来たのさ。」

と澄したもので、顔の割には落付いて居る。

然し明子は渡の氣質を良く承知して居るので、其心痛が何んなであらうと云ふ事を考へた。

渡は決して輕薄な所謂世の才子なる者の性質は具へて居らなかつた。雄々しく物事に氣が付いて彼れ此れと喧しくは云はないうかと思